

fig. 196 第2遺構面全景

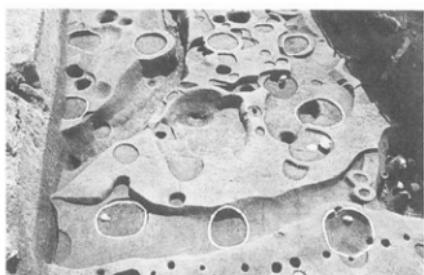


fig. 197 SB202



fig. 198 SK216

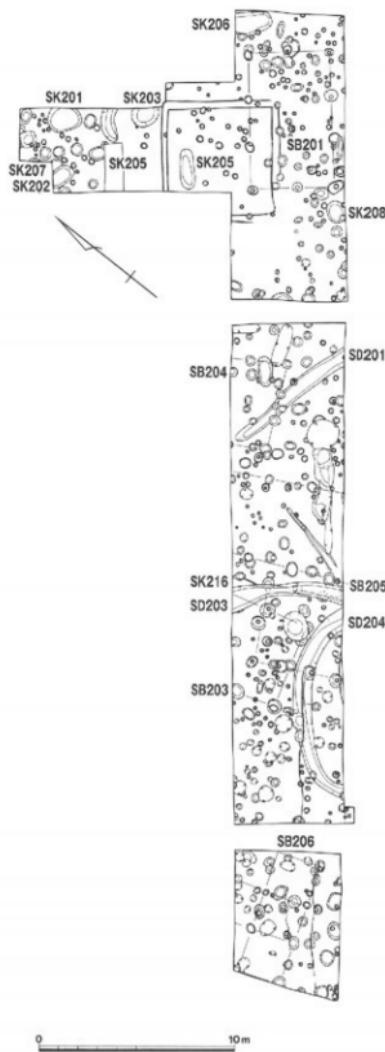


fig. 199 第2遺構面平面図

ある。柱間隔は東西が1.6m、南北が2mである。柱穴は直径45cm～50cm、深さ20cm内外で平面形は円形である。側柱のみの掘立柱建物である。

S B205 S B205は調査区の中央部で見つかった掘立柱建物である。建物は調査区の北側及び、南側に延びるため、全体の規模は不明である。東西は1間（4.4m）で南北は2間以上（5.8m以上）である。東西に関しては規模から類推して、調査区外に柱穴が存在すると思われ、2間になると考えられる。柱間隔は南北2m～2.4mである。柱穴は直径50cm～80cm、深さ30cm内外で平面形は円形である。側柱のみの掘立柱建物である。

S B206 S B206は調査区の西端部で見つかった掘立柱建物である。建物は調査区の北側及び、西側に延びるため、全体の規模は不明である。東西は3間以上（6.4m以上）で南北は1間以上（4m以上）である。柱間隔は東西が2.2m、南北が2.3mである。柱穴は直径40cm～60cm、深さ20cm内外で平面形は円形である。総柱の掘立柱建物であると思われる。

これらの掘立柱建物はS B201を除いて、ほぼ建物の向きに統一性が見られる。建物の時期は8世紀頃のものと思われる。

S K216 S K216は調査区の北側に延びるため、全体の規模は明らかではないが、一辺1.7m、深さ90cmの隅丸方形の土坑である。埋土の上層を浅くSD203が穿っている。埋土は暗茶褐色のシルト質極細砂やシルトで、中層から下層には投棄されたと思われる弥生時代後期の多器種の土器が埋没していた。土坑の底部はほぼ平らである。

土坑 S K201、206、208、211、212、217、218の土坑からは、弥生時代前期の土器が出土している。S K202、203、204、205、207、209、210からは遺物の出土はなかったが、埋土が弥生時代前期の遺物が出土した土坑と類似しており、これらも弥生時代前期の遺構と考えられる。

SD204 SD204は幅1m、深さ80cmの溝で、円弧を描いている。溝は調査区の南側に続いたために、その全体像は不明である。埋土から出土する遺物は古墳時代初頭の土器である。逆三角形状に掘り込まれ、底部はほぼ平らである。この溝と形状において、非常に類似した溝が今回の調査区の東隣の第3次調査でも見つかっている。



fig. 200 調査区遠景

第3遺構面 第3遺構面では土坑3基、溝2条、ピット16基が見つかった。調査区の中央辺りから西にかけて、黄灰褐色砂質シルトの間層をはさんで、弥生時代前期の遺物包含層となる。その間層は西に向かう程、厚みを増すが、調査区の中央辺りから東では無くなる。厚いところで約30cmである。

土坑 SK301は直径1.2m、深さ5cmの円形の土坑である。SK302は長径1.2m、短径1.1cm、深さ5cmの楕円形の土坑である。SK303は長径1.1m、短径90cm、深さ5cmの楕円形の土坑である。

これらの土坑からはSK302から弥生時代前期の土器が出土したのみであるが、ほかの土坑も同時期と考えられる。

地震痕跡 調査区の西部では平成7年1月17日に起こった兵庫県南部地震の痕跡が見つかった。第1遺構面で見つかった地割れの幅は1.3mで、長さは9mに渡って見つかった。地割れは下層に行くに従い、その幅を減じている。地割れの段差は約10cmである。この地割れの他にも、幅5cmぐらいの地割れ痕跡が調査区の東端で見つかっている。発掘調査によって、兵庫県南部地震の痕跡が確認されたのは初めてのことである。

3.まとめ 今回の調査は昨年度の第3次調査に隣接する部分であったが、確認された遺構は第3次調査と同じ時期であり、遺構の拡がりに関しても均一に拡がっていることが明らかになった。弥生時代前期に集落が営まれたのを始まりとして、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて再び集落が営まれている。この時期の住居は確認されてないが、土器を投棄したと思われる土坑等が見つかったことから、集落があったことが予想され、住居の存在も考えられる。次に奈良時代から平安時代にかけての上沢遺跡は興隆を極め、多くの掘立柱建物が建ち並ぶ一大集落を営むこととなる。その後中世にも集落が営まれているが、現地点では建物は確認されていない。しかし、井戸が見つかったことから類推すれば、間違いなく周辺に掘立柱建物が存在するものと考えられる。

特に第2遺構面で見つかった8世紀代の掘立柱建物群は、当時の上沢地区に大規模集落のあったことを物語り、これまでの周辺の調査成果と併せ、ますます上沢遺跡の重要性を強める発見となった。今後、隣接地での調査の進展によっては、さらに上沢遺跡の性格が明らかになるものと思われ、地域史を考える上でも重要な遺跡であろう。

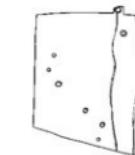
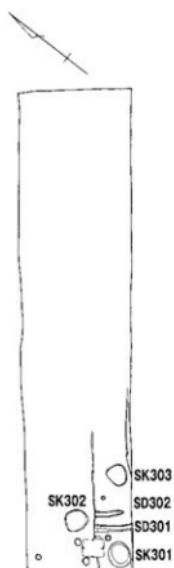


fig. 201 第3遺構面平面図

かみ さわ 28. 上沢 遺跡 第9次調査

1.はじめに

上沢遺跡は兵庫区と長田区との境界付近の扇状地上に位置し、過去、数回にわたって調査が実施され、縄文時代晩期～中世の複合遺跡であることが明らかになった。

今回の調査は街路築造工事に伴うもので、古墳時代後期～平安時代前期の遺構、弥生時代中期～中世の遺物が確認された。



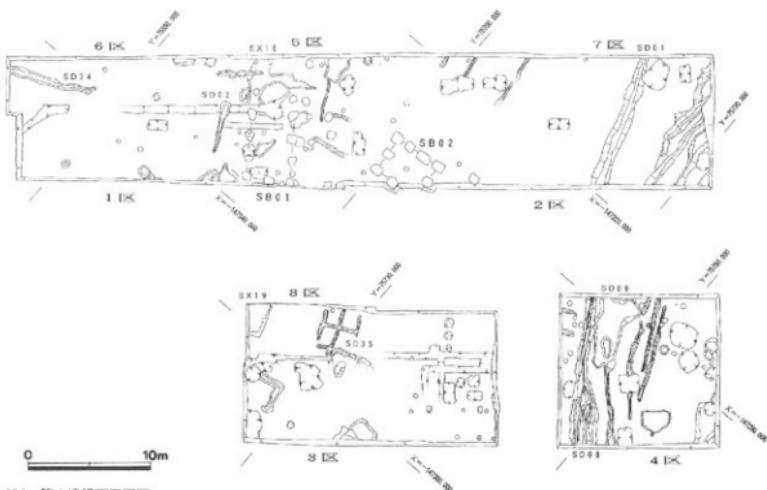


fig. 204 第1遺構面平面図

第1遺構面 主として奈良時代後期～平安時代前期の遺構が確認された遺構面である。全体としては、遺構は少なく、1区東端、2区西端、4区、5区中央部に集中している。遺構としては、掘立柱建物、溝状遺構などがある。

SB01 1区と5区にまたがって検出された2間×3間の建物である。柱穴は平面形がやや不整な方形または円形を呈し、一辺及び径が約50～90cm、深さ約30～40cmを測る。柱穴間隔は桁方向が約1.5～1.7m、梁方向が約1.8mである。

SB02 2区で検出された2間×3間の建物である。柱穴は平面形が方形または長方形を呈し、一辺が約70～110cm、深さ約50～90cmを測る。柱穴間隔は桁方向が約1.3～1.4m、梁方向が約1.5mである。

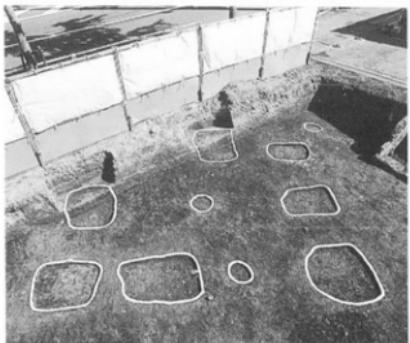


fig. 205 SB01



fig. 206 SB02

第2遺構面 庄内併行期～古墳時代末期の遺構面である。竪穴住居、大壁造り建物、土坑状遺構、溝状遺構、落ち込み状遺構などがある。

竪穴住居 S B03は1区で検出された一辺約5mの方形のもので、削平により遺存が悪く、周壁溝の痕跡でその存在が確認された。主柱穴は4本と考えられ、径約30～50cm、深さ約30～50cmを測る。

S B06は5区の東端で検出され、一辺約5mの方形のものである。一部で周壁溝を有し、主柱穴は確認しにくいが、4本の可能性が高い。S B07は8区の西端で検出されたが、削平により遺存が悪く、特に南側は周壁溝の痕跡しか確認できなかった。平面形は方形で、規模については、内側の2つの柱穴が主柱穴の可能性が高いため、その位置関係から推測すると、一辺が6mを越える大きなものと考えられる。主柱穴はこの2つの柱穴を含めて4本と推定され、規模は径約60～70cm、深さ約30～35cmを測る。

S B08はS B07との切り合い関係にあり、S B07の下で検出された一辺約4mのやや不整な方形のものである。屋内に平面形の歪んだ高床部を有し、主柱穴は4本で、径約30～50cm、深さ約30cmを測る。

S B09は7区で検出され、東端をSD36に切られるが、一辺約5m程度の方形のものと推定される。南に行くほど削平が著しく、2区に連続すると考えられるが確認されなかつた。周壁溝は一部で有し、主柱穴については不明である。

大壁造り建物 今回の調査地の1区において2棟が検出され、兵庫県下では計2例4棟となった。

S B04は建物の北側と東側に圍溝を有し、その溝内と南辺・西辺に3間×3間の柱穴を配する。溝の規模は、幅約60～90cm、深さ約10～15cm、柱穴の規模は、一辺もしくは径約50～100cm、深さ約30～40cmで、また、柱穴間隔は約1.0～1.5mを測る。围溝は遺構面

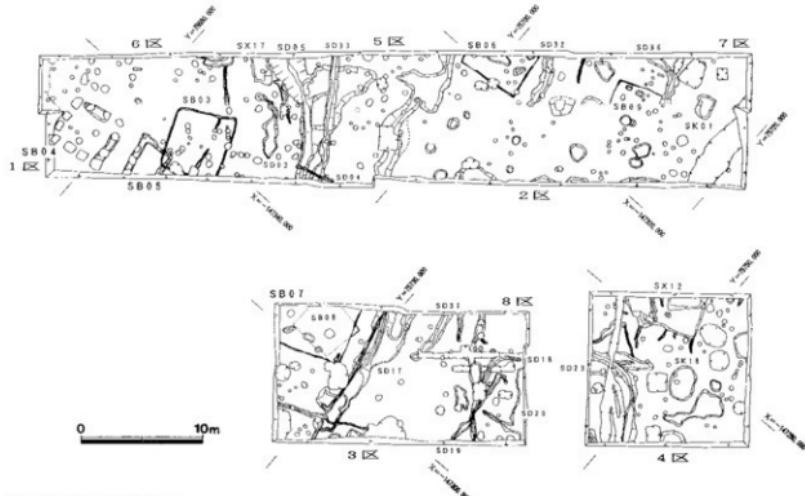


fig. 207 第2遺構面平面図

が削平を受けているため、一部にしか遺存しないが、四方にわたって存在していたものと推定される。

S B05はS B04の東隣で検出されたやや小ぶりの建物である。建物が南側調査区外へ延びるため、全体的な規模は不明である。残存する部分での規模は、圍溝が幅約30~60cm、深さ約3~10cm、柱穴は径約30~60cm、深さ約15~20cmで、また、柱穴間隔は約70~150cmを測る。

S B04は平面形が一辺約4.5mの正方形であるのに対し、S B05は短辺約3m、短辺3.7m以上の長方形状を呈し、上屋構造の違いが考えられる。現段階では断定はできないが、S B05の北側圍溝中央部に棟持柱らしい柱穴があるため切妻造り、S B04は棟持柱にあたる柱穴が見当たらないので寄棟造りの可能性がそれぞれ高い。

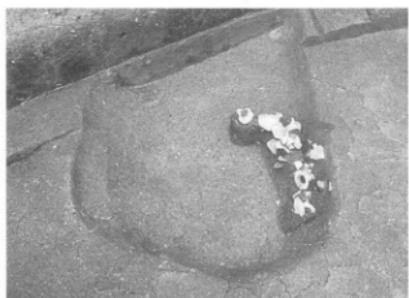


fig. 208 SK01遺物出土状況



fig. 209 SB08

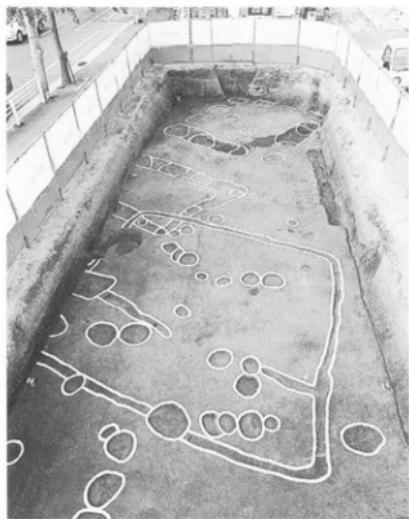


fig. 210 1区SB03~05



fig. 211 5~7区第2遺構面全景

出土遺物 今回の調査では、土器類の他に、臼玉などの滑石製品や鉄製品、木製品などが出土している。以下、各時期ごとに概要を記しておく。

時期の判明する最も古い遺物は弥生時代中期に遡るが、遺構に伴う時期の遺物は、庄内併行期以降のものである。同時期の遺物は土器類のみで、SD18・23の一部から、まとまって投棄されたかのようなかたちで出土している。

古墳時代については、中期以降のものが大半で、土器類に混じって、鉄製品や臼玉・勾玉・管玉・有孔円板・劍形・紡錘車などの滑石製品、少量ではあるがガラス小玉などが確認されている。今回の調査では、5世紀後半～6世紀初頭及び6世紀末～7世紀初頭の遺構が確認されているが、前者の方の遺物が圧倒的に多い。また、5世紀後半～6世紀初頭の中には、韓式土器や製塙土器の破片も多く含まれる。

第1遺構面に関わる奈良～平安時代については、日常雑器類の他、円面鏡、土馬、瓦なども出土している。

3. まとめ 今回の調査では、庄内併行期、古墳時代中～後期、奈良時代後期～平安時代前期の集落の一部と考えられる遺構とそれに関わる遺物が確認された。

庄内併行期については、溝状遺構程度しか確認されなかったが、SD23から庄内併行期後半に属すると考えられる一括の遺物が出土しており、過去の調査で弥生時代後半や庄内併行期前半の一括資料が得られていることによって、上沢遺跡の中での弥生時代から古墳時代への推移が明確になりつつある。

古墳時代については、大きく5世紀後半～6世紀初頭と6世紀末～7世紀初頭の2時期のものが確認されているが、遺構・遺物の比率は前者の方が高い。5世紀後半～6世紀初頭については、竪穴住居4棟をはじめ数多くの遺構が確認されたが、その遺構内や遺構面を覆っていた包含層中より、滑石製品や韓式土器、製塙土器などが多く出土した。特に、



fig. 212 調査区遠景

滑石製品は祭祀に使用されたと考えられており、同集落において何らかの祭祀が行われていたことを示唆するものである。また、韓式土器や製塩土器の破片についても、滑石製品と共に伴するような出土状況を示しており、これらも祭祀に用いられた可能性が高い。6世紀末～7世紀初頭の遺構で特筆すべきものは、1区で確認された2棟の大壁造り建物（SB04・05）であろう。この大壁造り建物は県下では神戸市西区寒風遺跡に次ぐ2例目の発見で、その他の地域では、滋賀、奈良、大阪に分布しており、特に滋賀に多い。このような形態の建物は渡来人によてもたらされたと考えられており、上沢遺跡と渡来人あるいは渡来系氏族との関わりも今後の検討課題の1つと言えよう。

奈良時代後期～平安時代前期については、遺構そのものが少なく、詳細な考察を行いにくいが、方形の大きな掘形をもった掘立柱建物（SB02）をはじめ、後世の堆積層からではあるが、円面鏡や土馬の出土、また、同じ上沢遺跡内の他の調査地区から金銅製帶金具、重圓文瓦なども出土していることから、この集落がこの時期においてかなり高い地位をもっていたことは明らかである。

以上のことから、従来、主として弥生時代前期・後期あるいは中世の集落址と考えられていた上沢遺跡が、今回の調査を含めた過去1～2年の調査で、弥生時代以降も継続的に営まれた集落であることが明らかになった。特に古墳時代から平安時代にかけては、周辺集落と比較してみても、遺構・遺物からかなり特異性をもった集落であることがわかる。そしてまた、上沢遺跡の様相がかなり具体的に認知できるのも、近い将来であるように思われる。



fig. 213
SD23遺物出土状況

かみ さわ 29. 上沢 遺跡 第10次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、室内遺跡の南西300mに位置する。室内遺跡は、伝房王寺跡との関連が考えられている遺跡であり、昭和53年度に室内小学校のプール建設とともに発掘調査によって平安時代の瓦が出土している。

上沢遺跡は、房王寺線拡幅工事に伴い、上記の経緯をもとに、伝房王寺跡との関連から昭和63年度に試掘調査を行い、発見した遺跡である。

その後、震災に伴い、区画整理事業が行われ、個人住宅の建設等に伴い発掘調査が行われている。おもな成果としては、第1次調査に引き続き弥生時代前期の良好な資料が出土した他、平安時代前期のピットから出土した帶金具などがある。



2. 調査の概要

今回の調査地は、六甲山南麓の現標高約17mの扇状地に立地しており、当該地においても、第1次調査同様、弥生時代後期および中世の遺構・遺物の広がりが予想された。

第1遺構面

第1遺構面は、灰褐色砂混シルト層の下面で検出された遺構面である。平安時代～鎌倉時代の遺構が、同一面で検出されている。

SD01

調査区東に位置し、北東から南西に走る、幅3.0m、深さ70cmを測る河道である。出土遺物としては、土器部などが出土しているものの、新しい時期の遺物も含まれている。

明治時代の地籍図と一致することから、この頃に廃絶したものと見られる。しかし、この川は、大井川と言われており、古くからこの付近を流れていたものとみられるが、今回検出した河道は、14世紀前半の遺物を含む遺構を切っており、これ以後にこの位置になったものとみられる。

SD03

調査区中央に位置し、北西から南東に主軸をもつ長方形の土坑である。規模は、長辺約9.0m、短辺約3.0m、深さ約1.0mを測る。中央西に一段深くなる部分があり、周囲には掘り込みの肩を保護するためとみられる杭を打ち並べた痕跡が認められる。内部の土層の堆積には、砂やシルト系の堆積が認められ、何らかの目的で水を溜めていたことが窺われる。

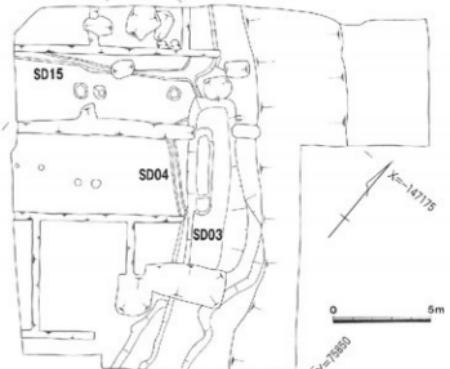


fig. 215 第1道構面平面図



fig. 216 SD03

る。埋土内からは、植物遺体の他、曲物などの木製品や、魚住系の須恵器が出土している。出土遺物から、13世紀後半～14世紀前半の間に存続していたものとみられる。

なお、多数の遺構と切り合い関係にあり、SD01に切られている他、SD04・SD11等を切っている。

第2・3遺構面 暗黒褐色シルト層下面の暗黄褐色砂混シルト上面で検出したものであるが、遺構としては平安時代前半から庄内平行期まで同時に検出した。

S D11 調査区中央に位置し、北西から南東に走る溝である。大半をSD03に切られている。溝は、幅0.68m、深さ0.57mを測り、断面U字形を呈する。溝の底には石を敷きつめ、一部に瓦も使用されていた。溝は中央部分で約20cmほど一段下がった状態となる。肝心な部分が搅乱のために詳しくは分からぬが、北から水が流れる状態では、小さな滝の様な状況になるものとみられる。埋土内の遺物には、「て」の字状口縁の土師器皿などが出土しており、時期としては、10世紀後半には存在していたものとみられる。

S K13 調査区北東隅に位置する土坑である。調査区内で北半部分を検出した。東角をSK12に切られている。一辺1.7m、深さ1.2mを測る正方形の土坑である。壁面はほぼ垂直に落ちており、埋土の状況がSE01に類似していることから、井戸である可能性がある。時期としては、埋土内の出土遺物より、12世紀前半と考えられる。

S E01 調査区西隅にて検出された井戸である。規模は、一辺2.6mの隅丸方形の掘形で、井戸内部が、内法0.74m、深さ2.0mを測る。井戸枠は、まず支柱を設け、下に桟木を膚穴に差し込んで補強し、それに沿わすように厚さ5cm、幅20～40cmの板材を横にして組み合わせていた。板材の組み合わせ方は、下3段は、膚穴を設け、切り組み状にかみ合わせ、井桁状にしているのに対して、板材を柱に沿わすだけで、匂字状にするだけである。また、板材には幾つかの節穴が開いており、井戸枠の外から木切れ等で塞がれていた。井戸の底には曲物等の施設はなく、地山を掘り下げただけのものである。掘形の埋土内には木材の削り屑等がかなりの量で出土しており、板材をこの場所で加工して組み合わせたものとみられる。井戸底や掘り方内部から、僅かではあるが遺物が出土している。特に土師器皿・

坏では、口縁部がゆるく内彎ぎみに開くものや、内面と口縁部外面をヨコナデし、底部はあらいヘラケズリを施すもの。内面には、放射暗紋があり、見込みに螺旋状の暗紋を配するものがみられる。これからみて、この井戸は奈良時代前半のものとみられる。

なお、井戸枠に使用された板材は、節穴等は認められるものの、転用としての痕跡は認められない。一部には、ハナとよばれる木材を切り出す時に作られた部分まで使用されていることから、専用材の可能性が高いものとみられる。しかし、上記のことから、専用材ではあるにしても、材木としては、端材を基に使用した節がみうけられ、すこしランクがさがる使用法とみられる。

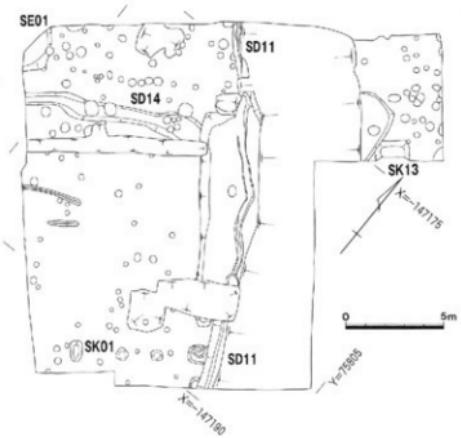


fig. 217 第2遺構平面図

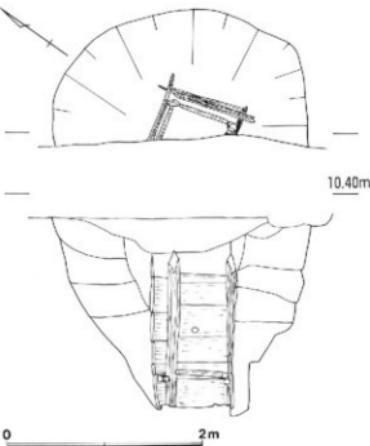


fig. 218 SE01平面図・断面図



fig. 219 SE01



fig. 220 SE01細部

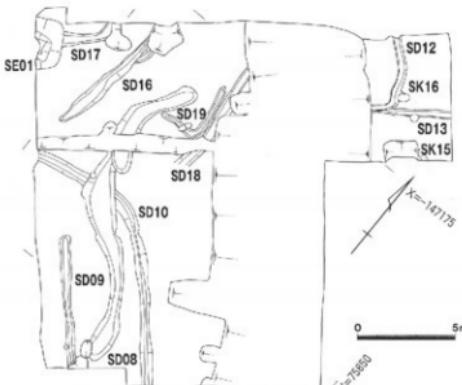


fig. 221 第3遺構面平面図



fig. 222 第2・3遺構面全景

柱穴 調査区南に位置するもので、一辺1.0m前後の柱掘形である。主軸方向をN-34°-Eにとる柱列となるが、建物になる可能性は低い。この柱列も奈良時代前半と考えられ、井戸と同時期のものである。なお、柱掘形は、SD11に切られている。

S D10 調査区中央に位置し、東から南東方向に弧を描いて走る溝である。幅70cm前後、深さ70cmを測るV字状の溝である。この溝からは、庄内併行期の土器が出土しており、時期もその頃とみられる。なお、同時期の同じ様な溝が隣接する第5次調査でも確認されている。方向は北北西から南南東に走るもので、このSD10につながる可能性は低いとみられるが、何らかの関連性はあるものとみられる。

S K15 調査区東端にて検出された土坑である。ごく一部を検出したのみで、後は調査区外に伸びまた、SK13に切られている。土坑内部から弥生時代前期の壺や甕が出土している。

河道 弥生時代前期の河道が北から南に緩やかに蛇行しながら調査区西半を流れている。この河道は、調査影響範囲の関係から、部分的に確認したに止まる。

3. まとめ 今回の調査では、中世の大きな土坑や10世紀の溝、奈良時代の遺構や庄内併行期の溝、弥生時代前期の溝等を検出した。奈良時代の遺構としては、井戸や柱掘形などであるが、周辺部でも同時期の遺構が検出されており、奈良時代にはかなりの規模の集落があった可能性が高い。しかし、柱列の方位や井戸枠の方位が真北を探っておらず、地形に左右された可能性が残るもの、官衙的な施設よりも邸宅である可能性のほうが高いものとみられる。なお、調査区内において柱列の方向と10世紀の溝との方向がほぼ一致しており、この頃まで奈良時代の地割りの様な方位が意識されていた可能性がある。これに関しては、上沢5・6次調査で検出している12・13世紀の柱の並びと奈良時代の方向とには違いがみられ、11世紀中に何らかの変化があったものとみられる。また、周辺部の遺跡では、西から大田町遺跡・上沢遺跡・旧三宮駅構内遺跡などで、奈良時代の遺構や遺物が確認されており、今後まだ増える可能性が高い。おそらく大輪田泊の関係から、古い段階からなにかの中央との関連があり、そのためにそれを示すような遺構・遺物が周辺地域で出土しているものとみられる。

かみ さわ 30. 上沢 遺跡 第11次調査

1. はじめに

上沢遺跡でのこれまでの調査は、平成元年（1989）に都市計画道路房王寺線の拡幅工事に伴い神戸市教育委員会が行った調査が第1次調査である。その時の調査では縄文時代晚期から弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期の集落跡等が見つかっている。その後、平成7年に第2次調査として、兵庫県教育委員会復興調査班が行った調査では、弥生時代の水田面が見つかっている。



fig. 223
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の第11次調査は住宅建設に伴う発掘調査で、兵庫県南部地震による復興補助金事業として、工事によって破壊される範囲についてのみ、記録保存のための調査を行った。

第1遺構面

第1遺構面は、地表下10~15cmで見つかる遺構面で、盛土下の淡茶褐色砂質シルトの包含層を除去した後に見つかる。見つかった遺構は土坑4基、ピット11基である。遺構は調査区の東側に集中して見つかった。調査区が少なために、遺構の規模を明確にはできなかった。出土遺物から中世の遺構面であると思われる。

第2遺構面

第2遺構面は、第1遺構面のベースになっている茶褐色極細砂層の包含層を除去した後に見つかる遺構面で、見つかった遺構は土坑2基、溝4条、ピット40基である。

S D201は幅1.4m、深さ40cmの溝である。S D202は幅45cm、深さ25cmの溝である。S D203は幅45cm、深さ30cmの溝である。S D204は幅45cm、深さ25cmの溝である。この4条の溝は南北方向に走り、ほぼ等間隔に並行する溝であるが、S D202~204の3条については同一規模である。また、S D202は南側の端が調査区内で終わっている。その他の溝については、調査区外に延びるために、途中で途切れるかどうかは不明である。S D201と204からは、須恵器、土師器に混ざって瓦片が出土している。出土遺物から判断して、この溝は平安時代頃のものと考えられる。

3. まとめ 今回の調査で特筆すべきは、並行して走る溝であろう。それは、所謂、水の流れる溝としての機能を持ったものではなく、建物を区画するために穿たれたものである可能性が考えられる。SD202～204は、堀などの構造物があった可能性も否定できない。その方向が南北方向に一致していることも上記のようなことを考える上で重要であろう。

fig. 224
第1造構面平面図

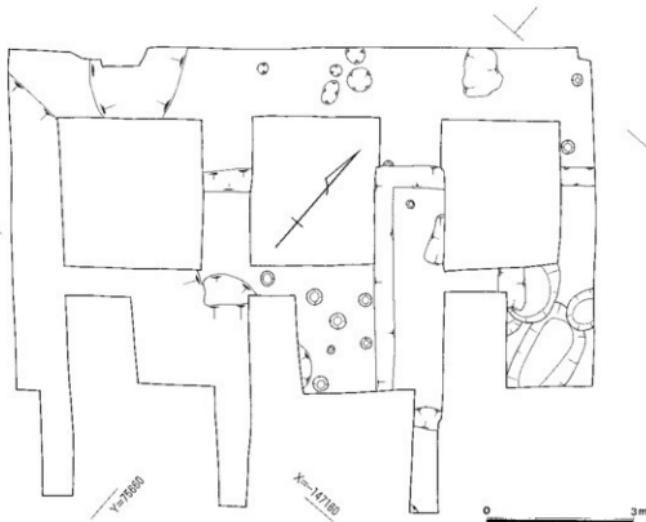
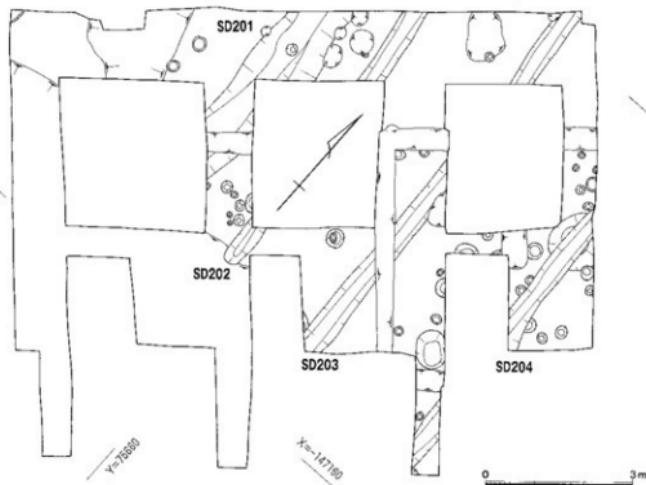


fig. 225
第2造構面平面図



かみ さわ 31. 上沢 遺跡 第12次調査

1. はじめに

上沢遺跡は六甲山地の南側に広がる平野の西部にある。当遺跡の西側には五番町遺跡や長田神社境内遺跡、南側には大開遺跡など縄文時代末から弥生時代にかけての遺跡が広がっている。またすぐ北側には奈良時代の寺院跡を含む室内遺跡がある。本遺跡は弥生、古墳、奈良時代、中世などの遺構や遺物を出土する複合遺跡である。弥生時代や古墳時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡群が発見されている。



2. 調査の概要

基本層序は次の通りである。

- | | |
|------|--------------------------------------------------------------------------|
| 基本層序 | 1層 現代の盛り土 |
| | 2層 耕作地の床土など |
| | 3層 遺物包含層・3-1 黒色粘質土（中世遺物含む）、3-2 黒色粘砂レキ土（弥生～庄内式土器含む）、3-3 黒色砂質土（弥生～庄内式土器含む） |
| | 4層 暗灰色粘質土 |

東・西 断面



fig. 227 調査区断面図

調査地は、かなり後世の削平によって損傷していたが、旧耕作土である2層（灰色砂質土など）を除去すると、3層（黒色土）上面で遺構面（第1面）を検出した。この遺構群からは暗褐色砂質土を埋土とする土坑や柱穴が4基検出された。周囲には搅乱が多く、また間に未調査部分を介していることもあって建物跡の復元は難しい。ただ15世紀を主体とする若干の中世土器を含んでおり、中世後期を主体とする遺構面だったと思われる。

さらに第1面の基盤である3層（黒色土）を掘削すると弥生時代後期から庄内式期を主体とする包含層があり、破片ばかりであるが弥生土器や庄内式土器を検出した。包含層の下は場所によってはレキが混入する面であるが、11基の小柱穴で構成される遺構面（第2面）を検出した。遺物は少ないが、1面も2面も黒い基盤に黒い埋土の遺構なので検出するのがつらかった。2層で検出した遺構の中には上層からの掘り込みが含まれている可能性がある。

3. まとめ 今回調査区の周辺では弥生～古墳時代にかけての遺構が検出されているが、本調査区ではほとんど遺構らしい遺構を検出しなかった。ちょうど今回は遺跡のある尾根の西側のはずれで、傾斜地状地形だった。もともと遺構が少ないか、削平を受けている可能性がある。

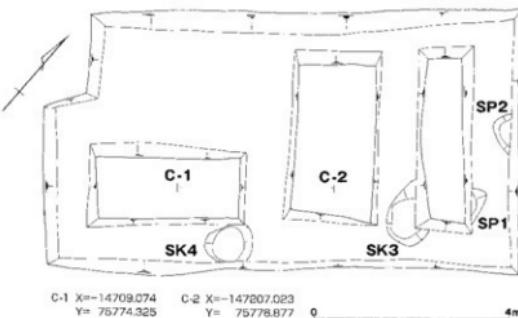


fig. 228
第1遺構面平面図

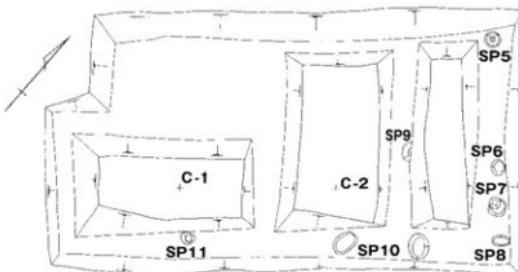


fig. 229
第2遺構面平面図

かみ さわ 32. 上沢 遺跡 第13次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、六甲山系から南に派生する会下山丘陵の南東側斜面に拡がる遺跡である。

上沢遺跡の調査は、平成元年房王寺線街路築造工事に伴う調査で発見されて以降、山手幹線拡幅に伴う調査や震災復興に伴う個人住宅再建に係る調査が実施され、今回の調査までで13次を数える。

房王寺線関連の発掘調査では、旧流路内から縄文時代後期～平安時代後期の土器が多量に発見され、周辺に集落遺跡の存在が想定された。山手幹線関連の調査では、弥生時代の堅穴住居や平安時代の掘立柱建物などが検出され、遺跡が都市計画道路房王寺線の南部から東部に拡がることが明らかになった。

もとより上沢通周辺は、木造の低家屋が密集する地域であったが、阪神・淡路大震災では多くの家屋が倒壊し一部では火災に見舞われた。今回の調査も阪神・淡路大震災により被災した個人住宅再建に伴う事前調査である。



fig. 230
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査は、現地表下 50cmまでの旧耕土・床土を重機械で除去して弥生土器を含む茶褐色粘性砂質土上面（第1遺構面）を検出した。第1遺構面では、平行して並ぶ柱穴を含む柱穴12ヶ所と溝状の落ち込み1ヶ所を検出した。さらに、第1遺構面を形成する弥生土器を含む包含層を除去して淡黄褐色粘性砂質土上面（第2遺構面）を検出した。第2遺構面では、ピット10ヶ所と南側に落ちる段落ちを検出した。

第1遺構面

第1遺構面では、調査区北よりで東西に平行して並ぶ柱穴4ヶ所を検出した。柱の間隔は、東西方向で1.8m、南北方向で2.1mを計測する。柱掘形の規模は長径 50cm～70cm前後の楕円形で、掘形底の平面形は方形である。柱掘形内の埋土からは、古墳時代後期の須恵器壺蓋片・土師器甕片などが出土した。4ヶ所の柱穴が掘立柱建物としてまとまるものであれば、調査区の北側に展開する建物と考えられる。調査区南部では、東西方向の溝状の落ち込みを検出した。溝の幅は1.0m、深さ 25cmを測り、断面形は逆台形状で、南側底部でU字状にくぼむ。

第2遺構面 第2遺構面では、径20cm~40cm大の円形ピットを検出したが、建物等にまとまるものはない。円形ピット内からは弥生土器細片が出土した。また、調査区南部で直線的に落ち込む段を検出したが、埋土内から少量の弥生時代後期の土器片を検出した。

3. まとめ 今回の調査は狭小な調査範囲であったが、山手幹線拡幅工事に伴う調査で検出された弥生時代後期~平安時代の遺構の北側への拡がりを確認できた。また、同時並行して調査実施された本調査地北西側での第11次調査の調査結果とともに、上沢遺跡の拡がりを知る手掛かりを得られたと考えられる。

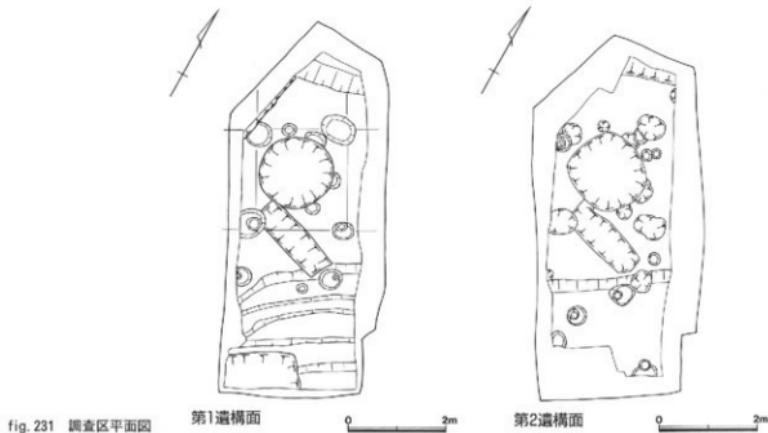


fig. 231 調査区平面図

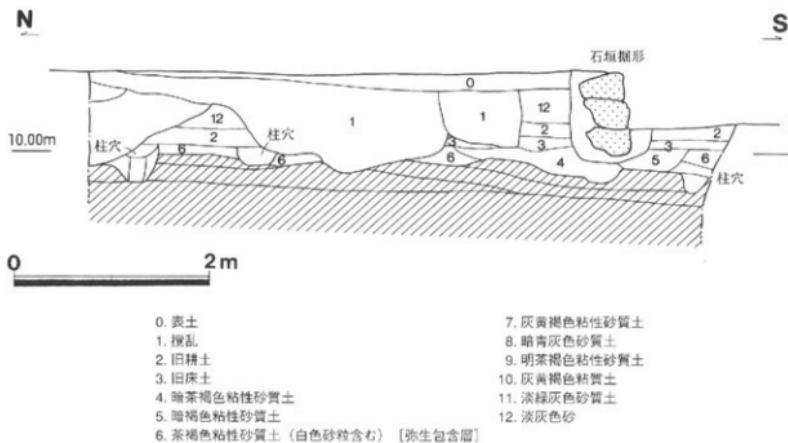


fig. 232 調査区東壁土層断面図

かみ さわ 33. 上沢 遺跡 第14次調査

1. はじめに

上沢遺跡での調査は、平成元年（1989）に都市計画道路房王寺線の拡幅工事に伴い神戸市教育委員会が行った調査が第1次調査に始まる。この調査では縄文時代晚期から弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期の集落跡等が見つかっている。



fig. 233
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、黄灰褐色砂質シルト層、灰褐色砂質シルト層の中世遺物包含層があって第1遺構面となる。第1遺構面のベース土は奈良～平安時代の遺物包含層である。その下層が第2遺構面となる。第2遺構面のベース土は弥生～古墳時代の遺物包含層となり、第3遺構面となる。さらに暗灰褐色系のシルト～極細砂層の厚い堆積の下層に弥生前期の第4遺構面が存在する。

調査では便宜上、北側の地中梁部分を第1トレチ、南側の地中梁部分を第2トレチとして、調査区の四隅の基礎部分を北側から左回りにグリッド3～6とした。

第1遺構面

第1遺構面は、調査区の北側の第1トレチでは地表下70cmで見つかるが、南側の第2トレチでは地表下1mで見つかる。第1遺構面で見つかった遺構は土坑8基、ビット7基であった。遺構の時期は13世紀頃のものであると思われる。なお、第2トレチに関しては、この第1遺構面の調査時点で、工事影響レベルに達したために下層の調査は行っていない。

第2遺構面

第2遺構面からは、土坑2基、ビット30基が見つかった。遺構の時期は奈良時代～平安時代のものと思われる。

第3遺構面

第3遺構面からは、土坑3基、溝1条、ビット28基が見つかった。

SK 301

SK 301はグリッド3で検出

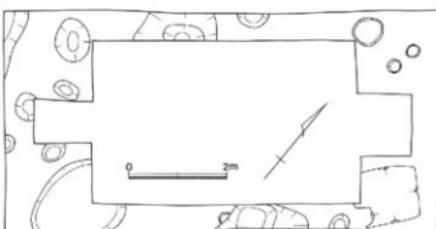


fig. 234 第1遺構面平成図

した土坑で、約半分が調査区外に延びるために全体の規模を明確にはできないが、直径約2mの円形の土坑になると思われ、深さ80cmである。土坑は中層で一旦設を持ち、底は丸く掘られている。土坑の中層から下層にかけては、多量の土器が出土した。この土器には完形品が無く、どれも破碎されていたため、

投棄されたものと考えられる。土器に混ざって磁石片が1点出土している。この土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭のものである。

S K302 S K302と303はグリッド6で見つかった土坑で、どちらも調査区外に延びている。

S K303 S K302は長径1.4mの楕円形になるとと思われる土坑で、深さは30cmである。S K303は直径1mの円形になるとと思われる土坑で、深さは20cmである。S K302はS K303より新しいが、どちらも古墳時代初頭のものである。

S D301 S D301はグリッド5で見つかった溝で、溝の一部が調査区にわずかにかかっているために、規模を明確にはできない。溝の肩部からはミニチュアの壺が出土している。出土遺物からこの溝の時期は古墳時代初頭のものであると思われる。

ビット 数基のビットからは、6世紀頃の遺物が出土している。

第4遺構面 第3遺構面の下層の暗黄灰色シルト質極細砂層を除去すると、黒色シルト層のよく締まった層があり、グリッド4ではその黒色シルト層の落ちが見つかっている。レベル的にはグリッド3・6では低くなっているので、グリッド4から東側のグリッド3・6までの間でその落ちは立ち上がると思われる。この落ちは今回の調査区の南側に位置する第3次調査時に見つかっている、弥生前期の河道につながるものと思われる。今回の調査では工事影響深度までの調査だったので、河道底までは掘削していない。

3. まとめ 今回の調査は、これまでに周辺で行われてきた調査成果を追跡するものである。調査の制約もあり、不明な点も多いが、遺跡の拡がりはより一層明らかになり、その密度も高いことが確認された。

第3遺構面

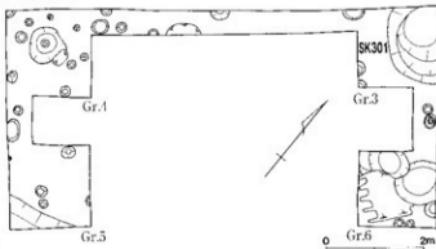
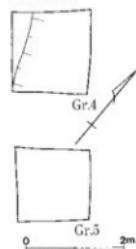


fig. 235
第2遺構面平面図

第4遺構面



かみ さわ 34. 上沢 遺跡 第16次調査

1. はじめに

上沢遺跡でのこれまでの調査は、平成元年（1989）に都市計画道路房王寺線の拡幅工事に伴い神戸市教育委員会が行った調査が第1次調査である。その時の調査では縄文時代晚期から弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期の集落跡等が見つかっている。その後、平成7年に第2次調査として、兵庫県教育委員会復興調査班が行った調査では、弥生時代の水田面が見つかっている。また、平成8年から行われた山手幹線の拡幅工事に伴う調査では、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代初頭、奈良～平安時代、中世と各時代の遺構が発見され、これまで詳しく知られていなかった上沢遺跡が同時期の拠点の大集落として認知されるようになり、複合大遺跡であることが明らかになりつつある。

今回の調査は山手幹線拡幅に伴う調査で、拡幅される道路の車道部分に当たる。今回の調査地は第3次・第8次調査範囲の南側に接している。



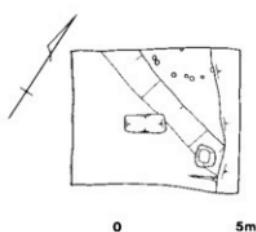
fig. 237
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、灰褐色砂質シルト層の包含層となり、第1遺構面が存在する。この第1遺構面は茶褐色砂質シルト層の包含層上面である。基本的な遺構面は近世の第1遺構面、古代～中世の第2遺構面、弥生時代後期・古墳時代の第3遺構面、弥生時代前期の第4遺構面となる。調査区は便宜上、東から1区～6区に分けた。



fig. 238
調査区設定図

- 1 区** 1区の調査は、アスファルト舗装の下、バラスを除去すると遺構面となった。遺構面からは浅いピットが8基見つかったのみである。調査区の約70%は自然流路になる。流路は東西方向のもので、流路の幅は調査区の西側に延びているために明らかに出来ないが、5.6m以上である。深さは最深部で53cmであった。出土遺物は殆どが自然流路内からであるが、奈良時代から中世の遺物が出土している。特筆すべきものとして土馬の一部が出土している。土馬は第3次調査でも出土している。
- 
- fig. 239 1区遺構平面図
- 2区～5区**
- 第1遺構面** 2区～5区の調査は第8次調査地点の南側に隣接する。第1遺構面は灰褐色砂質シルトの包含層を掘削し、茶褐色砂質シルト層の包含層上面で見つかる遺構である。土坑数基、ピット数十基が見つかった。遺構は浅い物から深い物まで多様で、平面形についても不整形のものが多く、耕作に伴うものである可能性がある。出土遺物は中世のものであるが、層位から考えて近世に埋られたものか中世でも近世に近いものだと思われる。
- 第2遺構面** 第2遺構面で見つかった遺構は掘立柱建物2棟、井戸1基、土坑2基、溝1条、ピット数十基であった。S B201は5区で見つかった3間以上×1間以上の総柱の掘立柱建物である。方向は真北方向である。S B202は5区で見つかった1間以上×1間以上の総柱の掘立柱建物になると思われる。柱間はS B201より広く、方向性も異なる。両方の建物共に出土遺物から判断して、12世紀頃の掘立柱建物と思われる。
- S E201 S E201は4区で見つかった井戸で、調査区の北壁際で見つかった遺構である。この井戸は円形の掘形に方形の井戸枠を持つもので、井戸枠埋土より墨書のある須恵器の坏身が出土した。12世紀頃のものである。
- 第3遺構面** 第3遺構面で見つかった遺構は竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、土坑11基、溝8条、ピット百十数基が見つかった。S B301は4区で見つかった一辺3.7mの方形の竪穴住居で周間に周壁溝が巡る。床面には区画の為と思われる浅い溝が走る。床面で見つかったピットの中には炭化材が出土しているものもある。主柱穴は明らかではない。
- S D301 このS B301の東側と西側にはS D301と302が走るが、これは第8次調査時に見つかった溝に続くものであり、S B301の周囲を円形に巡るものと考えられる。このS B301とS D301・302の時期は古墳時代初頭のものであると思われる。
- S B302 S B302は3区で見つかった一辺5mの方形の竪穴住居で、床面で土坑3基が見つかった。周囲には周壁溝が一部途切れるが、ほぼ巡っている。床面からは数個の土器が直上から出土している。主柱穴は明らかではない。出土遺物から判断して、弥生時代後期後半に属するものと思われる。
- S B303 S B303は5区で見つかった掘立柱建物で、第8次調査時に見つかりっていた柱穴と合わせて3間以上×2間の側柱のみの掘立柱建物である。
- S B304 S B304は3区で見つかった掘立柱建物で、2間×2間の側柱のみの掘立柱建物であると思われる。

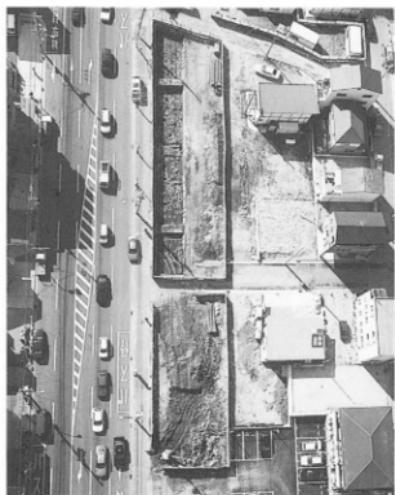


fig. 240 第3造構面全貌



fig. 241 SB301



fig. 242 SB302

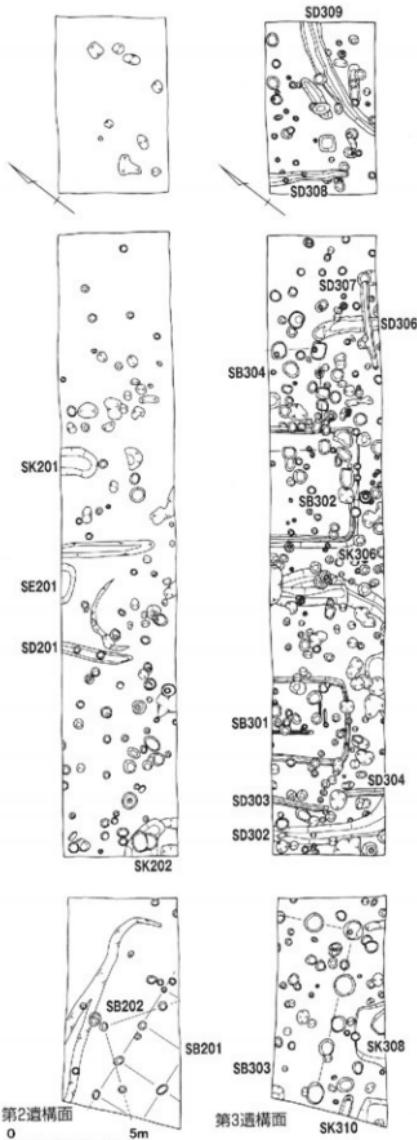


fig. 243 2～5区造構平面図

S D309 S D309は2区で見つかった溝で、調査区外に延びていてために規模は明らかに出来ない。溝からは弥生時代後期の土器が集中して出土している。

軒丸瓦 第3遺構面の包含層掘削時に奈良時代の重圓文軒丸瓦の瓦当が1点出土している。

第4遺構面 第4遺構面で見つかった遺構は土坑1基、落ち込み1基、ピット数基である。遺構は4SX401区・5区では見つかったが、2区・3区では無かった。SX401は5区で見つかった落ち込みで、調査区外に延びるために規模を明らかには出来ないが、直径5m、深さ30cmの円形であると思われる。埋土からは弥生時代前期の土器が多く出土した。

SP401 SP401・402からは完形品に近い弥生時代前期の壺・壺
・402 が出土している。

地震痕跡 4区の南半部では弧状に土層の段差が認められた。この段差は弥生時代前期の包含層では段差が認められるが、弥生時代後期の包含層では認められない。これは地震の地滑りによるものと考えられる。上沢遺跡では第8次調査の時にも兵庫県南部地震の地割れ痕跡が見つかっており、野島断層の活動によって引き起こされたと考えられているが、今回の地滑りも野島断層が弥生時代中期に動いた時に引き起こされたものと考えられ、上沢遺跡の立地が野島断層の影響を受けやすい地点にあることが考えられる。

6区 6区の調査区は第3次調査の3区の南側に隣接する。調査区の東端は近代の河道によって削平を受けている。第1遺構面では灰褐色砂質シルト層の包含層を掘削した後、掘立柱建物1棟、土坑2基、溝5条が見つかった。調査区の西側へは低く落ちている。掘立柱建物は調査区外に延びているが、2間×1間以上である。溝は地形に沿うように見ついているが、畑耕作に関わるものではないだろうか。出土遺物は中世の新しい時期から近世にかけてのものであると考えられる。



fig. 245 SX401



fig. 246 地震痕跡

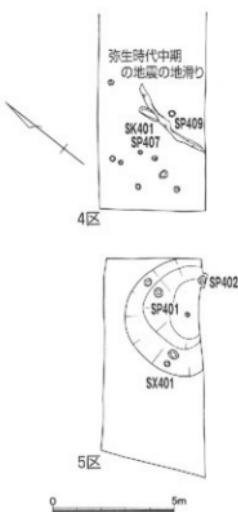


fig. 244 4・5区第4遺構面平面図

- 第2遺構面** 第2遺構面は溝が1条見つかっただけであるが、第1遺構面のベースとなる暗茶褐色シルト質細砂の包含層からは多くの遺物が出土した。遺物の時期は平安時代のものが最も多く、その頃の平瓦片も多く出土した。調査区の西側は第1遺構面と同じように低く落ちているが、この落ちは第2遺構面の時期以後、第1遺構面の時期までに形成された河道によるものと思われる。
- 第3遺構面**
- S B301 S B301は3間×2間の側柱のみの掘立柱建物である。時期は古墳時代前期であると考えられる。
 - S B302 S B302は2間×2間の総柱の掘立柱建物で古墳時代初頭のものであると考えられる。
 - S D301 S D301は調査区を南北に貫く溝で、第3次調査区から続くものである。溝の中からは完形品を含む土器が数点出土した。溝の時期は弥生時代後期後半である。
 - S D302 S D302は調査区の中央辺りから西方向に延び、南側に曲がる溝で、溝内からは完形品を含む多くの土器が出土した。出土土器は壺、甕、高杯と多種に渡る。出土土器の時期は弥生時代後期終末のものである。
 - S D303 S D303は調査区の北側、第3次調査区から続くものである。この溝は南に延びて、S D302に流れ込むが、出土遺物は同時期であり、溝の規模や深さは異なるものの、同一のものとも考えられる。

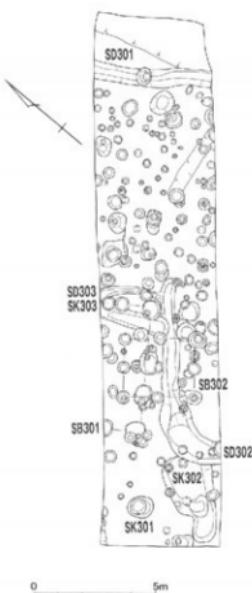


fig. 247 6区第3遺構面平面図

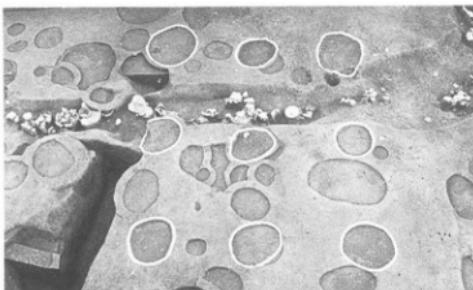


fig. 248 S B302



fig. 249 6区第3遺構面全景

3. まとめ 今回の調査では、これまでの上沢遺跡の調査成果を追隨するものであったが、これまで見つかっていなかった弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての竪穴住居が見つかったことは特筆されることであろう。4区で見つかったSB301は周縁を溝が巡るという特異なものであり、規模が比較的小さい部類に入るが、一般的な住居では無く、特別な用途をもった建物であったと考えられる。ただ、出土遺物には特異なものは見られない。住居の周縁を溝が巡る例は、神戸市西区の小山遺跡でも弥生時代後期の方形竪穴住居が1棟見つかっている。また、竪穴住居と新しい時期の掘立柱建物とが見つかったことは、集落構成の変遷を検討する上での好資料となるであろう。

弥生時代前期の集落の拡がりも概略は今回の調査で明らかになりつつある。弥生時代中期の集落は発見されて無く、これが自然地形の変動に関係するものかどうかは不明であるが、今後の周辺の調査で明らかになるものと思われる。そして弥生時代後期から古墳時代前期にかけての上沢遺跡の集落は大規模に拡大されるものと思われる。その後、奈良時代の遺構では今回は特筆すべきものは無かったが、同時期の重闕文軒丸瓦の出土や、第4次調査区で見つかっている銅製のベルト金具と合わせて、近接地での奈良時代の官衙の存在がより一層強くなった。今回の調査によって、奈良時代の集落の中心が今回の調査区の北側一帯に拡がるであろうと思われ、今後の周辺の調査によっては重要な遺構の発見も考えられる。その後も、上沢遺跡では平安、鎌倉と集落は引き続き営まれている。



fig. 250 出土重闕文軒丸瓦



fig. 251 調査区遠景

かみ さわ 35. 上沢遺跡 第17次調査

1. はじめに

今回の調査地は、現時点における上沢遺跡のほぼ東北限に位置する。上沢地区復興区画整理地区内における個人住宅建設に伴う発掘調査である。上沢地区内では換地に伴う住宅建設が急ピッチで進行していて、発掘調査も小規模ながら急増しており遺跡の様相が序々に明らかになりつつある。これまでの調査は、山手幹線沿いおよび周辺地域が主であったが、今回の調査地は若干はなれていて、1995年度の第2次調査地に近接している。



fig. 252
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序は、盛土、黄褐色砂質シルト、灰褐色シルトまじり砂（古墳時代～中世遺物包含層）(T.P. +14.1m)、暗灰色砂まじりシルト（古墳時代～中世遺物包含層）(T.P. +13.6m)、暗灰褐色シルト（古墳時代遺物包含層）(T.P. +13.4m)、青灰色シルト（古墳時代遺物を包含する流路埋土）(T.P. +13.2m)、青灰色砂疊（上層同様）となっている。駐車場部分の調査の影響深度は、この層までである。

検出された遺構は、北東から南西方向の流路1条のみである。規模については調査面積がわずか25m²であったことと、工事影響深度の関係で掘削限界があったため、北側の肩部が検出できただけで、幅や深さは不明である。埋土である青灰色シルト層からは布留式期の甕や高杯など28ℓ入コンテナーに2箱分出土しているほか、埋土上層からは古墳時代後期の須恵器片も出土している。布留式土器は比較的まとまって出土しており、全体的

にあまりローリングを受けておらず、比較的近處から投棄されたか、流れ着いたものであると考えられる。

3. ま と め 今回の調査地では流路 1 条が検出されたにすぎないが、埋土から出土した土器の状態から、ごく近くに古墳時代の集落の存在を窺うことができる。このことから、現在周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されていない神港高校グラウンドやその東方に、遺跡の範囲がひろがるであろうことが予想され、今後隣接地における開発事業等に注意が必要である。

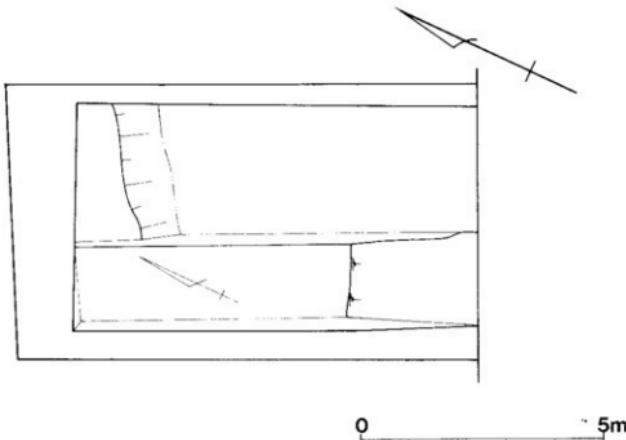


fig. 253 調査区平面図

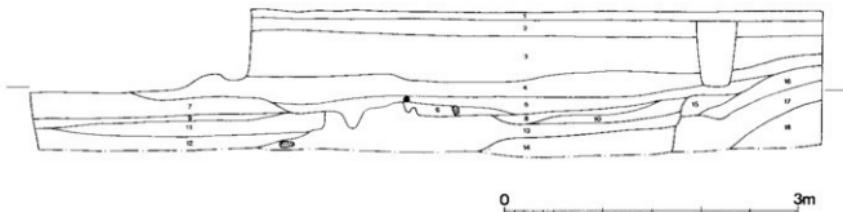


fig. 254 調査区断面図

- 1. 残土
 - 2. 黄褐色砂質シルト
 - 3. 灰褐色シルト混じり砂（古墳時代～中世遺物包含層）
 - 4. 暗灰色砂混じりシルト（古墳時代～中世遺物包含層）
 - 5. 暗灰褐色シルト
 - 6. 黄褐色シルト
 - 7. 暗褐色砂礫
 - 8. 淡灰色シルト
 - 9. 暗黄褐色砂
- 流路埋土（5～14 古墳時代遺物包含層）

- 10. 淡灰色シルト
- 11. 暗黄褐色砂礫
- 12. 暗灰褐色粗砂
- 13. 青灰色シルト
- 14. 青灰色砂礫
- 15. 暗褐色灰粗質砂
- 16. 黄灰色粘質砂
- 17. 暗灰色粘質砂
- 18. 黑灰色粘質砂

36. 上沢遺跡 第18次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、縄文時代から中世にいたる複合遺跡として周知されているが、兵庫区上沢地区は阪神大震災では特に大きな被害を受けた地域の一つであり、震災復興事業に伴って発掘調査件数が増加している。



fig. 255
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建築工事の影響深度である敷地の北西境界点を基準とした現地表下 60cm (T.P. 11.025m) まで調査を実施した。

調査地は震災前まで道路であったため水道やガスなどの埋設管が存在しており、調査区の約半分が大きく搅乱をうけていた。第1遺構面を現地表下 52cm で確認した。

第1遺構面

溝状遺構 3 条、不定形の土坑 1 基、落ち込み、ピットなどを検出した。大半が中世の遺構と考えられるが、若干の時期差も考えられる。以下、主な遺構について述べる。

S D01

調査区東部で検出した溝状遺構で、搅乱によって 3 つに分断されている。中央部では東側にほぼ同規模の溝状遺構である S D02 が検出されているが、北部では S D01 と 1 つになっている。幅 44~118cm、最深部の深さ 16cm を測る。S D01 と S D02 は他の遺構と違ってやや上層から掘り込まれており、中世のなかでもやや新しい時期の遺構と考えられる。埋土は淡灰色疊混じりシルト~細砂である。

S D03

調査区南西部で検出した溝状遺構で、幅 28~36cm、深さ 5~12cm で東部はやや深くなっ

ている。埋土は灰色シルト質細砂である。

SX01 調査区中央部で検出した不定形の土坑で、擾乱によって切られているため、全体の形状などは不明である。幅96cmで、東部は深くなっており、深さ35cmを測る。

その他、鋤溝痕と思われるSX07・10やピットなどを検出している。

3. まとめ 今回の調査では中世のものと思われる遺構面を確認したが、調査は工事影響深度までにとどめたため、下層については調査を実施していない。このため、遺跡内における当調査区の全容について明らかにするには至らなかったが、周辺の調査結果から判断すると、下層についても埋蔵文化財が存在することは確実である。

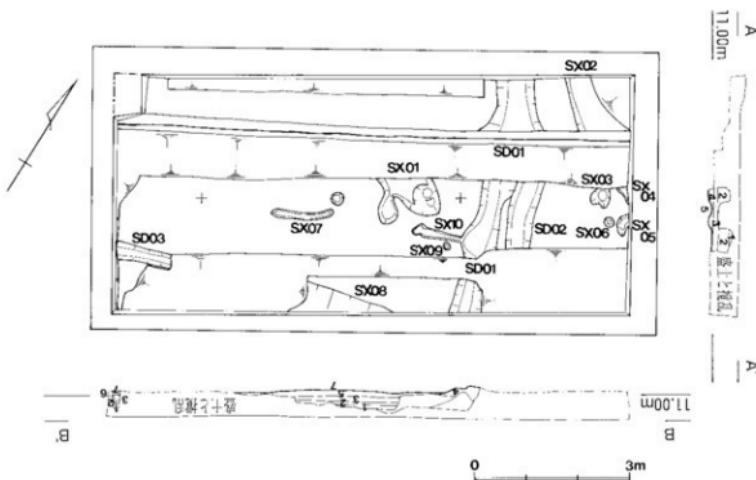


fig. 256 調査区平面図・断面図

A・A'

- 1. 灰黄色シルト質細砂
- 2. 淡灰色シルト質細砂
- 3. 灰色細砂混じりシルト
- 4. 灰黄色シルト混じり細砂
- 5. 暗灰褐色シルト

B・B'

- 1. 灰黄色シルト混じり細砂
- 2. 灰（黄）色質細砂
- 3. 灰（茶）色シルト質細砂
- 4. 淡灰色細砂混じりシルト～細砂
- 5. 暗灰褐色シルト質細砂
- 6. 暗灰褐色シルト
- 7. 暗灰褐色シルト

ゆのやま ゆのやま ご てんあと
37. 湯山遺跡（湯山御殿跡） 第1次調査

1. はじめに 六甲主峰に連なる山並みの北、神戸市北区有馬町に寂靜山極楽寺は所在する。有馬温泉はかつて湯山とよばれ、飛鳥時代に舒明天皇・孝徳天皇が訪れていることが記録に残るなど、往時の都である奈良・京都から一番近い湯治場として都から多くの人々が訪れている。古い歴史をもつ有馬湯山ではあるが、考古学的にはほとんど未開拓で、今回の発掘がこの地で行われるはじめての考古学的調査である。

調査の契機 有馬極楽寺の庫裡の下には豊臣秀吉の湯殿跡として伝えられてきた石組みの遺構が存在する。平成7年に起こった阪神大震災によって極楽寺も大きな被害を受け、本堂は修復されたが、庫裡はこれを解体し、古い部材も利用して再建することになった。「太閤の湯殿あと」は、今回の建て替えのため、二百年ぶりに露天となり、これを機会に発掘調査が行われることになった。昨年度、平成8年12月20日に調査が開始され、引き続き今年度もこの作業を行った。



fig. 257
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要 調査の結果、安土桃山時代の遺構・江戸時代の遺構が検出され、奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代・江戸時代およびそれ以降の遺物が出土している。

江戸時代 有馬極楽寺は江戸時代に二度火災に遭っている。一度目は元禄8年(1695)6月29日におきた大火、二度目は安永2年(1773)4月14日におきた大火によるものである。現在の有馬極楽寺の本堂は天明元年(1781)10月に上棟されたものである。

安永2年の火災層は比較的薄く、最近の攪乱もあって遺存状態が悪かったが、下層の元禄8年の火災層およびその整地層は厚さ30cm以上が残り、遺構面の遺存状態も良好であった。

元禄8年の火災層を除去すると当時の地表面が良好な状態で残されており、礎石・石段・柵・カマドなどが確認された。

また、火災時の炭や焼土に混じって当時の生活用品が多量に残されている。食器類は同じ形、同じ模様の皿や茶碗がかたまって出土しており、セットの食器類が箱に入ったまま焼け落ちたものと推測される。寛永通宝などの銅錢・鋸杖・引き出し把手・キセル・毛抜きなどの銅製品も多く出土している。

安土桃山時代 湯ぶね・桶など湯殿関連の遺構および園池・石垣・植木移植跡など庭園関連の遺構が検出された。出土遺物および古記録から豊臣秀吉の湯山御殿跡の一部であると判断される。

S X01 「秀吉の湯殿あと」と伝えられる方形の石組み遺構。この遺構と思われるものが宝永7年(1710)の『有馬山会図』に描かれている。S X01は、元禄8年の火災層を切り込んで造られており、全体としては古いものでないことが確認された。ただし、一辺は他の三辺と石の積み方・風化の度合いが違い、この遺構は一時期の所産ではない可能性がある。

入口階段 この遺構の入口階段部分も現状の石段の石垣の壁を除去すると、さらに古い石段が検出され、数次にわたる作り替えが行われていることも確認できた。

S D02 S X01手前の石垣最下には排水口が開口しており、この排水溝は北西方向に暗渠となってのびている(S D02)。この暗渠はこれを凌ぐために安永2年(1773)の火災層を切り込んで掘り直されているように、長期にわたり機能し、手入れされているため、その構築がいつの時期になるのか判断に苦しんだ。しかし、S X01自体が元禄8年(1695)の火災層を掘り込んでいる点、ならびにS D10およびS X06との切り合い関係からも、この暗渠が元禄8年の火災以降の寺院再建にともなって構築されたものと判断される。



fig. 258 S X01

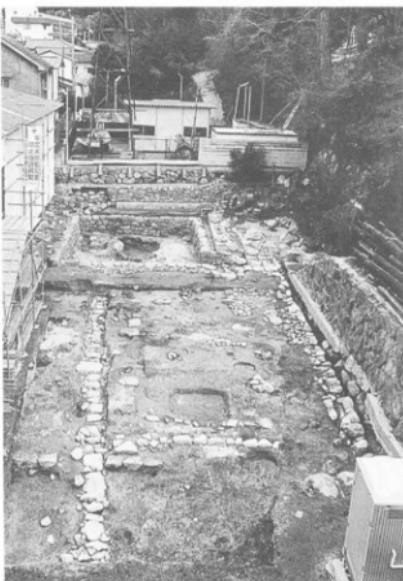


fig. 260 第2遺構面全景



fig. 259 第1遺構面全景

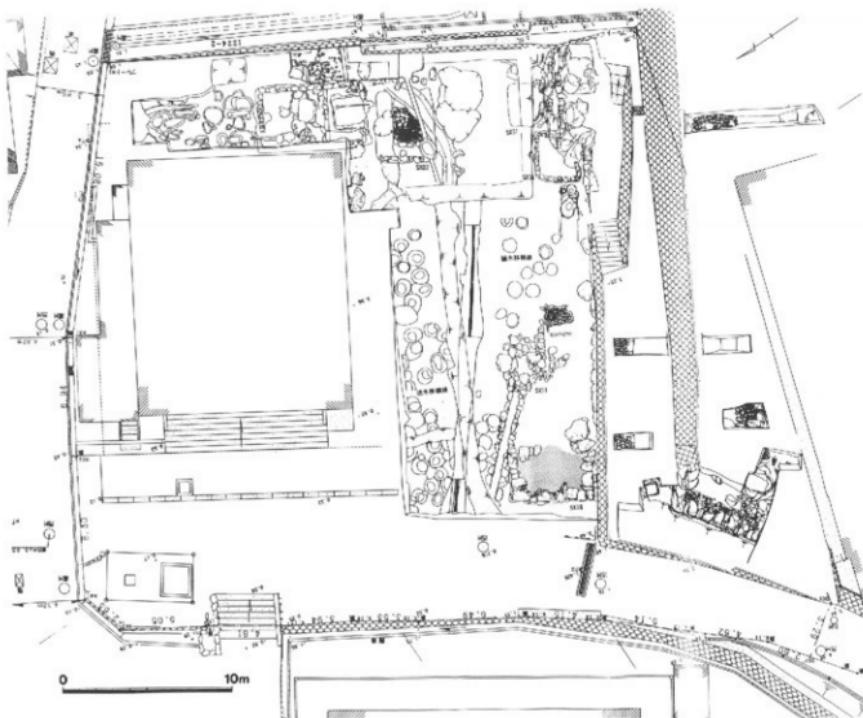


fig. 261 第3遺構面平面図

湯殿関連遺構 調査区の南東部、極楽泉源近くに集中して存在する。S X01によって破壊される遺構が多いことからすると、痕跡すら残さずに破壊されてしまった遺構がS X01内にあった可能性が高い。

S X02 S D01・S D03・S X01などと切り合い関係にあり、いずれよりも古い。S X01によって南西側は床面を残し大破、S D03によって床面南隅を壊される。掘形は一辺4m程度の隅円方形で、底面に黄色粘土が敷かれる。ここに一辺30cm程度の亜角礫を1.9×1.9mの方形に並べ、この内側を浴室とする。東角にあたる $\frac{1}{4}$ には一辺20cm程度のやや偏平な亜角礫がおおかた正方形に並べられ、残りには碎石状の角礫が敷きつめられる。

裏込めには黄色粘土と灰色シルト混じり砂が互層で詰められる。遺存状況の比較的良かった浴室の北東辺で裏込めの粘土が面的に直立して検出されており、枠石の上に有機質の、おそらくは板壁が立っていたものと推測される。石敷き上面から第3遺構面までの高さは約80cmがある。

この遺構の北東側の遺構面は平坦であるが、北西側はこの遺構に向かって坂状に下がっ

てくる。この状況からすると半地下式のこの遺構の北西側が入口であろうと考えられる。そうなると北西辺の裏込め構造が違うことも了解される。この辺だけが浴室のぐるりと掘形の外側の二重に石積みが施され、しかも外側のものも浴室内側に面を向けて積まれており、両石積みの間には黄色粘土が充填されている。

遺構を埋める土砂は流水にともなう砂およびシルトの互層で、中国製磁器青花片・備前焼花け片が出土している。敷石の床面には湯あか、酸化鉄の沈着がない。床面敷石の間に堆積していた灰色粘土には人間の頭髪・体毛が遺存している。

床面に有馬温泉の湯の特徴である湯垢=酸化鉄の沈着が認められないことから、この遺構が湯ぶねである可能性は低く、民俗例との比較から蒸し風呂であると推定される。

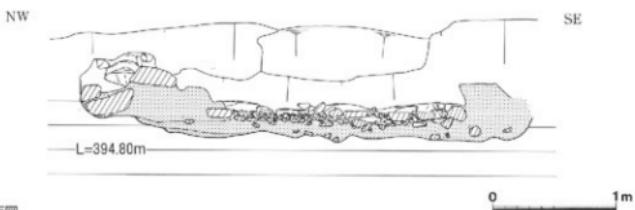


fig. 262 S X02断・立面図

fig. 263
本堂南側
遺構面全景

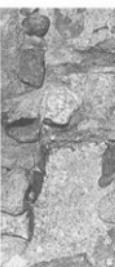


fig. 264 S X02



fig. 265 第3遺構面全景

S X23

S X26・SK04・SD01などと一緒に存在したもので、SX02よりも新しい。現地表から浅いため、後の攪乱を受けている。6.8m×4.0mの長方形土坑に黄色粘土を詰め込んだ遺構で、ぐるりには一辺20~40cmの礫が粘土上面に面をあわせて並べられる。南西の $\frac{1}{2}$ を区画する石列があり、ここに二段に下がる掘り込みがある。一段目は約2.0m×約3.0mの広さで、平坦に黄色粘土が敷かれ、この上面にわずかに酸化鉄が沈着している。その中央が約1.9m×約2.0mの範囲でさらに一段下がる。ここには枠状の石が一部残るが、一段目のような黄色粘土のきれいな敷きつけは認められない。

二段目の床下には埋め込み式のパイプあとが確認された。このパイプは直径約6cmの竹製ものである。このパイプはSX23の南西辺をほぼ垂直に下がり、直角に曲がって床下を約1.7m這い、その先が20cm×10cmの長方形の枠につながっている。

このような構造から、この遺構も湯殿関連のものと思われる。パイプには酸化鉄の沈着が認められず、これも蒸し風呂と推定される。この遺構を埋め立てる土砂中から丹波焼壺・美濃焼天日茶碗・志野焼皿・中国製青花皿等が出土している。

S X26

SX23と一緒に存在した遺構で、SX26は底面に石敷きをもち、遺構面から石敷き上面までの深さは約60cmをはかる。調査できた3辺には幅約15cm・高さ約20cmの角材が枠としてはめこまれていることが確認できた。枠の内法は約2.0m×1.4m以上となる。底面に見えている石敷きはこの枠材を置いた後に置かれている。

石敷きはべつとりと酸化鉄および粘土に覆われており、ここに湯がためられていたことが明らかである。壁にも酸化鉄の沈着があり、これから湯の深さは敷石上面から5~7cmであることが判明した。湯の深さが10cmに満たないことから、この遺構を湯ぶねと考える

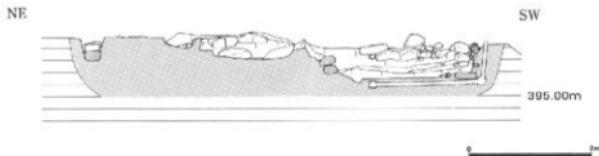


fig. 266 S X23断・立面図



fig. 267 S X23



fig. 268 S X23底面給気管

ことは困難である。温泉の源泉を木枠で囲い、ここに礫を入れるという同様の施設が民俗例にはいくつも見られ、この遺構も同様と思われる。

S K04 S K04も黄色粘土を使った同様の施設である。粘土が面的に直立して残っている部分があり、板枠があった可能性がある。内法で $2.1\text{m} \times 1.2\text{m}$ 以上がある。底面も黄色粘土が厚く貼られる。凸凹のある底面にも、S X26ほどではないが酸化鉄の沈着がみられる。南隅から樋S D01が伸びる。S X26・S K04・S D01は源泉から湯をひくための一連の施設と考えられる。

S D01 S X01がその機能を失って以降にS D03→S D01の順で溝が掘削されている。S D03は素掘りの溝であるが、S D01には幅約20cmほどの断面方形の樋がおさめられていたことを痕跡から確認することができた。S K04から湯をひくための樋である。

S D06 源泉方向から調査区の中央付近を横切ってのびる暗渠式の樋である。途中でS D01とぶつかり、そこからは並んで北西、温泉寺方向にのびる。土層断面の観察からも同じ掘り方内にS D01とS D06が設置されていることが確認でき、この両者は違う源泉からひいた湯を同じ地点へひく施設と考えられる。

S X31 地山の岩を利用して、石積みで枠をつくる平面方形の遺構。北西—南東辺内法で約2.1m、遺構面からの深さ約65cmをはかる。底面には硬く酸化鉄が沈着している。極楽泉源側の南東辺にここへ湯をひくための樋あとが確認された。この遺構を埋め立てる上砂中から、青鐵部向付・丹波焼搖籃・店津焼皿等が出土した。

S X34 地山の岩を利用して、石積みで枠をつくる平面方形の岩風呂。内法一辺約2.1m、遺構面からの深さ約65cmをはかる。底面には硬く酸化鉄が沈着している。

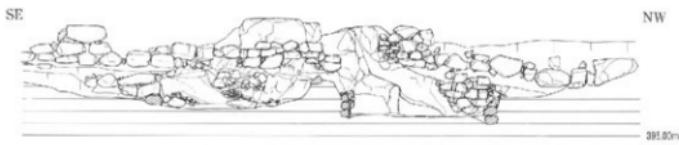


fig. 269 S X31・34断・立面図



fig. 270 S D06



fig. 271 S X34

庭園関連遺構 調査区の南西部で検出された。園池・建物基礎・植木移植跡等が検出された。

S X11

茶の湯に使用するための水をひき、それを汲むための園池。上流からひかれた水を小規模な滝として池に落とす構造になっている。池の石組みは大ぶりの花崗岩・凝灰岩を直径3 m程度の範囲に組み、池底には青い碎石が敷かれ、池底の中央付近には花崗岩で組んだ浅い凹みがある。

池の東側には一辺約1 mの前石がおかれて、ここから滝をながめ、その一段下に据えられた珪化木に下り、池底の凹みの水を汲んだと考えられる。池の下流は一段落とされ、水が石組みの溝を直線的に流れ下る。

S X11が瓦と粘土を使って埋め立てられていることもあって瓦類は1.5 tを越える量が出土した。瓦には平瓦・丸瓦のほか、桃の図柄をもつ鬼瓦・鰐などがある。これらには大坂城および四天王寺から出土した瓦と同じ文様の型を使った軒瓦があり、農臣家専属の瓦師が湯山御殿に葺かれていた瓦を製作していることが明らかになった。また、湯山御殿が建てられた文禄・慶長年間よりも古い天正年間の瓦のあることも判明し、この瓦は胎土の特徴から大阪で作られたと確認できるものがあり、湯山御殿の建物の一部には大阪から移築された建物の存在した可能性がある。

S X18

S X11の排水溝の左岸は石積みが分岐し、これはひとかかえ以上ある石を用いた石垣となつてさらに直角に屈曲し、北西に面する石垣へと続く。後世の搅乱をうけ、遺存状況が



fig. 272 植木移植痕



fig. 273 S X18



fig. 274 S X11

悪くはっきりとしないが、この石垣の裏には大量の礫が詰め込まれ、この部分はあるいは建物の基礎になる可能性が考えられる。石垣の前面にも石が敷かれる。

植木移植痕 園池および石垣遺構ほか、一部の地点を除く調査地の全域にわたって径1m程度の土坑が50以上確認された。これらの土坑の一部には、植木の根を巻いたと思われる藁縄が遺存しており、その内側にはこの周辺の土とはまったく色調の違う土が詰まっていた。これら遺構のほとんどは庭園の植木の移植あとであると推定される。

3. まとめ これまで地元では極楽寺・念佛寺のあたりに秀吉の湯山御殿があったと言い伝えられてきたが、正確な地点を伝える文書や絵図などの史料がなかった。今回の発掘調査によってこの伝承の正しかったことが明らかになったことが今回の調査の最大の成果であろう。

文禄3年(1594)に秀吉の湯山御殿が作られた際には、付近の家々65軒が強制退去させられているという記録があり、その敷地はかなり広いものであったと考えられる。また『有馬温泉史料』には慶長の大地震によって倒壊した湯山御殿修理費用明細の古文書がひかれており、これによって倒壊した御殿には化粧の間・湯殿・雪隠・湯屋・数寄屋などがあり、地震後さらに仮の御殿・新湯仮の湯屋・馬屋などが建てられたことが知られる。

今回の調査範囲においては、湯山御殿の礎石等は検出されなかつたが、池の構造、前石と滝の位置関係、またこの付近の地形から、御殿自体は極楽寺本堂から念佛寺のある地点にあったものと考えて間違いないだろう。今後、周辺の調査の進展が期待される。



fig. 275 S X11内瓦当出土状況



fig. 276 S X11内軸出土状況

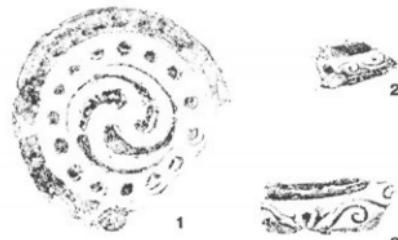


fig. 277
安土桃山時代瓦拓土
(2-3 大坂城と同范、6 四天寺と同范)



ゆの やま 38. 湯山遺跡 第2次調査

1. はじめに

湯山遺跡は有馬川上流域の南岸で、愛宕山から続く丘陵上と有馬川の段丘上に位置する遺跡であり、周囲は有馬温泉の湧出地帯として知られている。

今回は個人住宅の建設に伴い、工事により影響を受ける約80m²の調査を実施した。

今回の調査地は、愛宕山から続く丘陵端部に造成された平坦面の北東側に位置する。現在この平坦面は温泉寺、極楽寺、念佛寺の寺地が多くの部分を占めており、調査地も念佛寺に接している。第1次調査地からは北東へ約60mの地点である。

調査地の北側は有馬川へと続く急斜面であり、現況ではコンクリートによる防護壁により壁面を維持している。



fig. 278
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

4面の遺構面を確認している。なお、第3～第4遺構面については工事により影響のあるグリッドー1部分に限り実施した。

第1遺構面

整地層と考えられる暗褐色砂質土の上面が遺構面になる。この整地層上面で江戸時代末期頃からの遺構を確認した。

S D01

幅約1.5m～2.5m、深さ約30cmで、東西方向に延びる溝状遺構である。溝内で多数の礫を検出した。この礫の下面から多数の銅銭（寛永通宝）が出土している。遺物から、江戸時代末

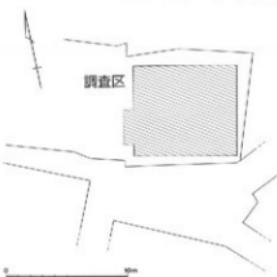


fig. 279 調査区設定図

期頃の遺構だと思われる。

SK02 調査区の東端で検出した規模の大きな土坑である。長方形で、幅は東西約2.5m×南北約4.0mを測る。

土坑の北半は深さ約90cmを測る。北西端だけは不整円形に落ち込み、深さ約110cmとなる。中央付近に2~3段の石組みを施し、土坑の南半は深さ約50cmを測る。この南半の底部は粗い石敷きである。

土坑には中層～上層近くまで礫が投棄されていた。この礫層からは、江戸時代末頃の陶磁器が出土している。また礫上面の覆土には、7世紀の須恵器蓋も破片で出土している。

第2遺構面 下層の造成に伴うとみられる石垣を埋没させて、さらに拡張した平坦面が遺構面になるもので、基本的には近世の寺院等に関連する遺構面であろう。

調査区の東側は、この第2遺構面を覆う整地層が存在せず、第1～第2遺構面を同一遺構面で検出している。この為SK02は第2遺構面で検出しているが、時期的には第1遺構面に伴う遺構となる。



第1遺構面

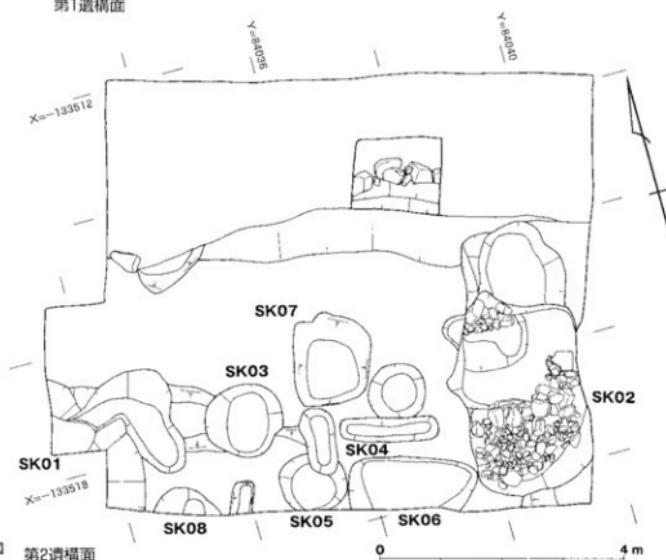


fig. 280 調査区平面図 第2遺構面



fig. 281
第2遺構面全景

S K04 径約60cm×140cm、深さ約30cmを測る土坑であり、S K05を削平している。土製品が出土している。

S K05 径約140cm、深さ約25cmを測る楕円形の土坑である。暗黄褐色砂質土が堆積している。
第3遺構面 淡黒褐色砂質土（土壤化層）の上面が遺構面となる。

石垣築造盛土 淡黄灰白色砂質土の盛土を高さ約1.8mの規模で行い、調査区の南西側へと続く平坦面を造成している。平坦面の端部には石垣を構築していた。

平坦面を形成する盛土は、直径約1.0m～1.5mの巨礫を投棄しながら築造している。盛土から遺物は出土していない。築造状況を確認すると幅約10cm～15cmの水平堆積が重なり、強固に突き固められている。丁寧に築造された盛土である。

この盛土はグリッドー1の中央でとぎれており、垂直に近い斜面を造っている。本来はこの斜面に石垣を組んだが、埋没時に抜き取り再利用を計った様である。石垣の裏込めに使用した石列は比較的良好に検出されている。

石垣の裏込め石は側壁に沿って3列以上の並びを検出している。また、盛土の築造に際して投棄した巨礫の側面を、裏込めとして使用している状況も確認している。

石垣埋没盛土 淡黄茶褐色砂質土の盛土を施し、石垣を埋没させている。またこの盛土に対応して北側斜面で新たに構築した石垣の状況を、グリッドー2の調査で確認している。

この盛土により南西側から広がる平坦面を、造成できる限界近くまで拡張した事が理解できる。



fig. 282 軒丸瓦出土状況



fig. 283 石垣裏込石



fig. 284 石垣検出状況

盛土の築造状況は石垣築造時の盛土と比較して粗雑であり土質も粗い。この盛土から、天正～慶長にかけての軒丸瓦、五輪塔、土師器の小片が出土している。

第4遺構面 淡白灰色シルト（地山面）が遺構面になる。この遺構面を覆う淡黒褐色砂質土、暗茶褐色砂質土には、中世の須恵器片等と伴に陶磁器片も出土している。

柵列 柵列状に延びる杭か柱穴状の落ち込みを検出している。遺物は出土していない。
約50cmの間隔で、東西方向に延びている。

3. まとめ 第1遺構面に対応する遺構にはSD01、SK02がある。SK02を廃棄し、埋め戻した後にSD01が造られている。江戸時代末期からの遺構面であり、現在の町割りで念佛寺に沿って存在する町家に関連する遺構であろう。

第2遺構面では多数の土坑を検出している。陶磁器の他、型造りの土人形や土製品等の出土遺物から、主に18世紀頃の遺構だとと思われる。これらの土人形、土製品には神仏関係の製品が多く認められる。湯山御殿は農臣家の滅亡後に破壊され、跡地に極楽寺、念佛寺が建立されている。この寺院に関連する遺構を主に検出した様である。

第3遺構面では盛土により造成した平坦面と、その端部の斜面に施した石垣を確認している。現況では周囲に念佛寺等の存在する広い平坦面が広がり、その北東端部に位置する。

盛土の築造状況を確認すると、多数の巨礫を投棄して強固に突き固めながら築造している。丁寧で規模の大きな土木造成を行ったことが理解できる。ただしこの石垣に伴う盛土から遺物は出土せず、築造した時期は不明である。念佛寺の寺地を造成したのでなければ、土木造成事業の規模や内容から湯山御殿に伴う可能性も存在する。

石垣を埋没させ平坦面を拡張した盛土からも、その時期を特定できる遺物は出土していない。天正～慶長にかけての軒丸瓦が出土しており、それ以降である。

この石垣より下層に存在する二次堆積層からも、須恵器片と安土桃山時代～江戸時代の陶磁器片が出土している。ただし陶磁器は細片であり、時期の特定はできない。石垣を築造する以前から付近で生活が営まれていた事は理解できる。

39. 長田神社境内遺跡 第10次調査

1. はじめに

長田区のほぼ中央、式内社長田神社境内周辺に広がる長田神社境内遺跡は、茹藻川左岸の沖積地上に立地する集落遺跡である。遺跡の発見は大正13年における長田神社再建工事の際に土器が出土したことによる。昭和62年以降、再開発事業、道路拡幅などに伴い発掘調査が行われ、縄文時代晩期から近世にかけての遺跡であることが確認されている。特に弥生時代後期から古墳時代を通じて、大型の住居址を含む多数の竪穴式住居址をはじめとする遺構が連続と構築された状況が確認されており、周辺における拠点的集落として把握されている。また平安時代～鎌倉時代、あるいは近世にかけての掘立柱建物・井戸・木棺墓なども検出されており、周辺は人々の生活痕が多く刻まれた土地といえる。



2. 調査の概要

調査区内には北に接する新湊川を明治37年に開削した際の堆土が厚く盛土され、現地表から2.5mの深さに及ぶ。盛土の下は開削時の耕土・床土層及び近世の旧耕土層で、その下にある厚さ5～10cmの灰色砂質土は中世までの遺物を含む。この層の下が弥生時代の遺物包含層で、それぞれ10～20cmの厚さで良好に遺存しており、調査区全域で認められる。包含層の下層が黄色極細砂層の遺構面である。また遺構面下部については断ち割り調査の結果、洪水層もしくは河道堆積が厚く堆積して青灰色のシルト層に至る状況が確認されている。下層から遺物は出土していない。

検出遺構

黄色極細砂層面で竪穴式住居（住居址状も含む）9棟、掘立柱建物5棟、土坑27基、溝30条、落ち込み2基、柱穴約150基が検出された。以下順に概略を記す。

S B01 一部が調査区外へ続くが、径約12mの円形の堅穴式住居である。検出面から基底部までの深さは約40cmである。幅約1.5mの高床部が巡る。柱は8本と考えられ、うち6本が確認されている。中央土坑は径約60cm、深さ約10cm、平面形はやや歪な円形で断面形は浅い皿状を呈する。周囲2mの範囲に薄く炭の分布が認められる。周壁溝は、建物の一部が調査区外にあるため明らかでないが南側を除く部分に巡るようである。また高床部の一部に幅1.5m×3mで内側に張り出す部分があり、磨石や台石状の偏平な石が出土、作業台などの機能を有すると思われる。住居址の時期は弥生時代後期～終末期である。



fig. 286 調査区平面図



fig. 287 調査区（北半部）全景



fig. 288 調査区（南半部）全景



fig. 289 S B01



fig. 290 S B02

S B02 東西約7m、南北約3m以上、深さ20cmの隅丸方形の竪穴式住居でS B01に先行する。約1m~1.3mの高床部が巡る。径約1.3m、深さ15cmの不定形な中央土坑があり、周辺に炭が濃密に分布する。高床部の内側の一部で幅20~30cmの溝が検出された。時期は弥生時代後期である。

S B03 東西2m以上、南北3m以上、深さ約10cmの方形の竪穴式住居である。遺物は少ないが時期は弥生時代後期と考えられる。南辺の一部に幅50cmの張り出し部分がある。

S B04 南北3.3m、東西2.5m以上、深さ15cmの方形の竪穴式住居である。床面で5本の柱穴が検出されたが上層に伴うものは不明である。東西両肩部で検出された土坑が主柱穴となる可能性も考えられる。時期は古墳時代初頭と考えられる。

S B05 S B12・13に切られ、一部が調査区外にのびるが径約8.5mの円形の竪穴式住居と考えられる。幅1mの高床部が巡る。検出できた柱は4本であるが、それらの位置から8本柱



fig. 291 Pit 702

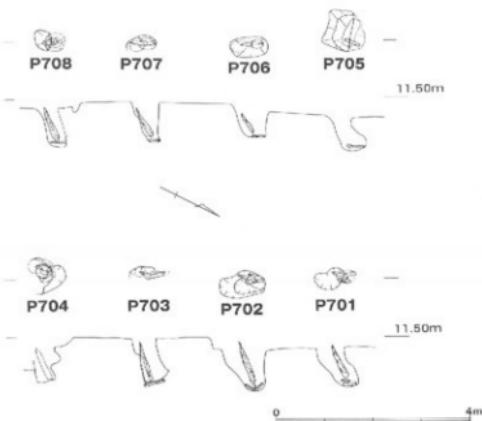


fig. 292 S B07平面図・断面図

の建物と推定される。長径 2.2m、短径 1.5m、深さ 15cm、埋土に炭が充填した梢円形の中央土坑をもつ。また外側に幅 70cm、長さ 2m の張り出しが付随する。

S B06 南北 1間（4m）以上、東西 1間（2m）以上で調査区外にのびる西辺を除く三方で 1間（2m）の庇が付く。柱穴は径 40cm 前後で残りのよい柱穴で深さは約 40cm である。いずれの柱穴も底に 20cm 角の礎石が据えられている。Pit 608から羽釜が出土しており中世の建物である。

S B07 南北 3間×東西 1間（6m × 4.5m）の掘立柱建物である。柱穴掘形の規模に差があり、径 40cm のものから長辺 80cm ほどの長方形の掘形をもつものがある。いずれも上部が南方向にずれており、底は北側に抉れた状態で検出される。Pit 705を除くすべての柱穴から柱材・礎板が出土したが、柱材も掘形に合わせて南北に 15°ほど傾いている。柱材のうち半分は礎板から浮き上がっているが、これは地震に伴う液状化現象により砂粒が上昇、柱材を押し上げた痕跡と考えられる。

Pit 705（S K15）には柱の抜き取りの後、人頭大の石とともに弥生時代後期の甕を投棄しており、住居の廃絶時期と考えられる。

S B08 南北 4間×東西 4間（9m × 9.5m）の総柱の掘立柱建物である。柱穴掘形は径 30cm で、遺存の良好な柱穴で深さ 30cm を測る。Pit 811から白磁片が出土している他に顯著な遺物の出土はないが中世の建物である。

S B09 調査区西側で検出された南北約 5m、東西約 3m の平面隅丸長方形の竪穴式住居である。各コーナー部には径 80cm の柱穴があり、中央北よりには長辺 2m、短辺 1m の長方形の土坑がある。土坑の南側は三日月状に一段深くなってしまい、肩部には焼土塊、埋土には炭が混じる。また土坑の北寄りは浅く窪み、西へのびる幅 20cm の溝と繋がる。同様の溝は南にも 1 条あり、ともに排水の機能をもつものと考えられる。床面には現位置を保つ遺物が多く、甕・壺・高坏・鉢などの他、ミニチュアの壺が出土している。上層の最終埋土に



fig. 293 S X03内仿製鏡出土状況

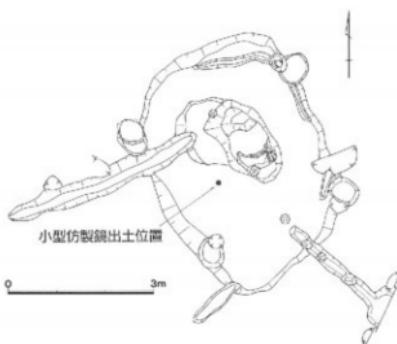


fig. 294 S X03平面図

は多量の遺物が投棄されており、大半は細片の状態である。住居址内の遺物は弥生時代後期～終末期にかけてのものである。

またこの層からは、小型仿製鏡が出土している。鏡は鏡面を下に向け、地面に対して約50°の角度で斜めになって出土した。鏡は完存しており、面径62mm、厚さは縁部で約3mm・文様帶部約1mm、鈕径18mmを測る。鏡背は平縁（幅12mm）→櫛齒文帯（4mm）→圓線2条（3mm）→波文帯（4mm）→鈕（18mm）で構成される。平縁部分が12mmと幅広で、やや反り上がり外側に傾斜した面をもつ。主文の波文は1mmの凸線で表現されている。鈕は径18mm、厚さ（高さ）約8mmの半球形で非常に大振りである。市内での弥生時代の小型仿製鏡の出土は本例で7例目である。S B09については多量の土器の投棄や鏡の出土などから祭祀に関わる施設であることも想定される。

S B10 南北4間×東西3間（9m×6m）の縦柱の掘立柱建物である。柱穴掘形は径30cmで、遺存の良好な柱穴で深さ30cmを測る。柱穴掘形から須恵器が出土しており、中世の建物である。

S B11 調査区西端で検出された南北6m以上、東西5.5m以上の方形の住居址である。検出面からの最大深は45cmである。南辺から西辺にかけてL字形に高床部が確認され、北辺にも対称に同様の高床部が設けられたと考えられる。L字形のコーナー部分で径80cm、深さ55cmの柱穴が検出され、2本の主柱を持つ建物に復元される。東壁際には径1mの土坑があり、その周囲から弥生時代後期の甕が数点出土した。

S B12 大半が調査区外に広がる。調査区内での検出長は6.5mであり、径7m程に復元できる。平面形は円形で、幅1mの高床部をもち、その内側は六角形で、各コーナー部に柱が設けられたと思われる。一部で幅20cmの周壁溝が検出された。時期は弥生時代後期である。

S B13 S B05・12の西脇で一部が検出された。一辺4m以上の隅丸方形の住居址と考えられる。土層観察の結果、S B05・12を切り込む新しい住居址であったことが確認されている。時期は弥生時代終末期であろう。

S B05・12・13の先後関係は土層の観察などからS B05が古く、その後S B12、13の順に構築されたと考えられる。

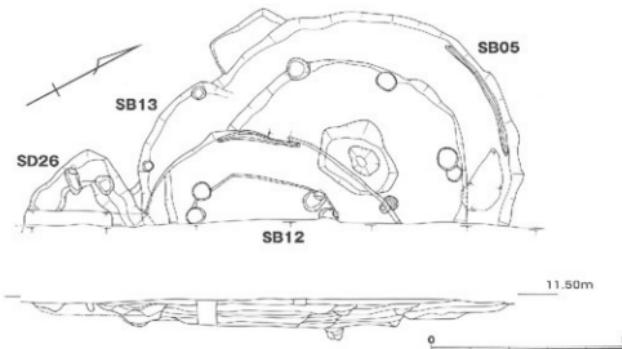


fig. 295 SB 5・12・13平面図・断面図



fig. 296
SB 5・12・13

SB14 南北4間×東西3間(7m×6.2m)の総柱の掘立柱建物である。柱穴掘形は径20cmで、遺存の良好な柱穴で深さ30cmを測る。建物の詳細な時期は不明である。

掘立柱建物は現段階で4棟確認できているが、今後の検討により数は増すであろう。

土 坑 ここでは27基検出された土坑のうち主なものについて記す。

SK01 長辺2m、短辺1.5mの土坑で平面形はやや歪な長方形である。南側は浅く皿状に窪み、北側は一段深くなる。北側での最大深は約50cmである。小片ではあるが弥生土器がまとまって出土しており、弥生時代後期の遺構である。

SK15 長径約1.2m、短径1mの楕円形の土坑である。浅く皿状に窪み、最大深は約20cmである。拳大～人頭大の石が詰められ、一部には火を受けた痕跡が認められる。石とともに弥生土器が出土している。時期は弥生時代後期である。

その他の土坑については上記の遺構に比べ遺物の出土量が少ないが、大半は弥生時代のものと考えられる。

- 溝 溝についても30本検出されたうちの主なものについて記す。
- S D02 幅25cm、深さ10cmの細い溝であるが、検出長は約20mに及ぶ。断面形はU字形で緩やかに蛇行しており、西端近くで遺物が集中して出土する箇所がある。弥生時代後期である。
- S D05 幅30cmの溝で、調査区内では約7m検出されており、調査区外に続く。L字形に直角に曲がっており、住居址周壁溝の痕跡の可能性がある。
- S D06 幅25cmでコの字形に検出された。溝で囲まれる範囲は一辺約4mほどの方形の区画に復元できる。S D05同様、住居址の周壁溝の痕跡と思われる。
- S D11 S B04に切られる最大幅60cmの溝で検出長は約7mである。S B04北東隅に接する部分の溝底が1mにわたり一段深くなっている。数個の甕が出土している。いずれも弥生時代後期のものである。
- S D17 S B07のPit 701と703を繋ぐ形で検出された幅50cm、深さ15cmの溝である。他の部分では確認されていないが布掘りが意識された可能性がある。
- S D24 調査区西で検出した最大幅2.8m、深さ約15cmの溝である。弥生時代後期の遺物が出土しており、3ヶ所ほど遺物が集中する溜まり状の部分が確認された。遺構面を形成する下層流路の最終埋土の可能性がある。
- 噴砂痕跡 噴砂の吹き出しに伴う亀裂は主に調査区西半で確認された。最も顕著な部分で6cmほどの幅をもつ。断ち割り調査の結果、遺構面を形成する黄色極細砂層の下部に部分的に堆積する径1cmほどの礫を含む砂礫層が吹き上げたものであることが確認された。噴砂は調査区内に堆積する明治期（新渢川開削時）の床土下部までは到達しているが、さらに上方には及んではおらず、検出幅、上昇した砂粒の大きさなど、震度7クラスの地震であることも勘案して慶長の大地震による痕跡と考えるのが妥当と思われる。また先に述べたS B07で見られた地震による痕跡は遺構の埋没後、内部に遺存した柱材等がこの時期の地震による液状化の作用により動いたものと想像される。

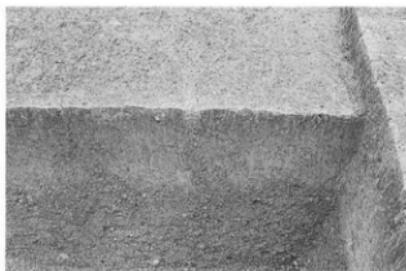


fig. 297 噴砂痕跡断面



fig. 298 地震痕跡確認位置図

3. ま と め 今回の調査では多くの遺構が検出され、長田神社境内遺跡とする集落の一端を窺い知る数多くの資料を得ることができた。従前、遺跡は調査地の南側で地形的に大きく落ち込み（自然河道にある）、遺構も希薄になるものと想定されていたが、今回の調査における検出遺構の在り方から、より南にまで弥生時代の遺構が続く可能性が高くなった。

コンテナ約115箱に及ぶ多量の弥生土器の出土をはじめ、径12mを有する大型の竪穴式住居などの多くの遺構の存在は、改めて長田神社境内遺跡が周辺における拠点的な集落の役割を担っていたことを示唆するものである。SB09へ多量の土器と共に投棄された小型彷彿鏡の出土もこれらを傍証するだろう。今後さらに調査が進めばより長田神社境内遺跡の性格が明らかになるであろう。

また慶長の大地震に伴うと考えられる噴砂が確認され、400年前にこの地を震度7を越す揺れが襲っていたことが証明された。SB07の柱穴に遺存した柱材などの検出状況により、地震がもたらす地盤への作用の一例が示された点は大きな成果といえる。

なお、整理作業の過程でSB01の埋土中から人形土製品（後頭部結髪土偶）が出土していたことが判明した。土製品は頭部のみで大きさは高さ4.7cm、幅2.7cm、厚さ2.5cmを測る。顔面部は長方形に近く、眉・鼻は貼り付けにより表現しており、眉直下には沈線を加え、閉じた目を表現している。頭部には特徴となる断面三角形の凸帯が付加される。

形態から縄文時代晩期～弥生時代前期の所産と考えられるが、今回の調査ではこの土製品以外に同時期の遺物は確認されておらず、混入とは考えにくい。周辺部で縄文時代晩期の遺構が確認されていることから、弥生時代後期の段階で採集されたものが保有されたと推測される。小形彷彿鏡の出土とともに集落内祭祀を考える上で興味深い資料といえる。

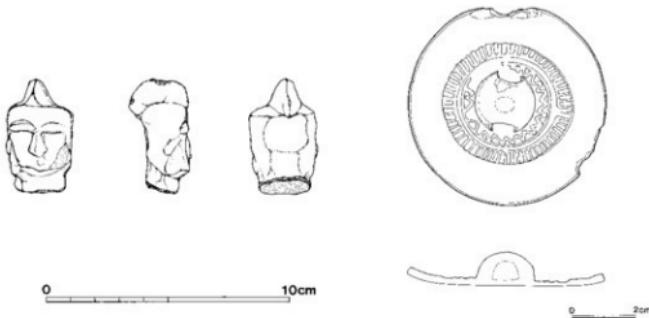


fig. 299 土偶・小型彷彿鏡実測図

ながたじんじゅけいだい 40. 長田神社境内遺跡 第11次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、神戸市長田区長田町・大塚町周辺に所在する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡で、式内社長田神社が大正13年に焼失し、再建工事の地ならしを行った際に発見された。東西を丘陵に挟まれており、茹藻川によって形成された沖積地および段丘上に立地している。

今回の調査は、防火水槽の新設工事に伴うもので第11次調査となる。

fig.300
調査位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

基本層序は、表土・旧表土・淡黄色粗砂・黄色シルト・灰白色シルト・黄色極細砂・灰褐色砂質土・灰褐色粘質土〔遺物包含層〕・青灰色細砂である。

機械掘削後の精査の結果、試掘調査で確認された上層の遺物包含層は、東半にのみ残存することが判明した。西半は、洪水砂である第3層淡黄色粗砂が厚く堆積し、この砂を除去すると窪地状になり、調査区中央で石列を検出した。西半はさらに淡褐色粗砂・淡青灰色粗砂が堆積し、以下は暗灰色～青灰色粘土と植物層の互層となる。

石列は、西側に面を揃えて石が組まれており、高さ1.2mの石垣であることが判明した。平面形は中央部と北西部で約120°屈折しており、北側の屈曲部付近は石材の崩落が著しい。石垣は20～30cm大の石材を用いて構築しており、南半部は、石垣上端から約1m下で数十cmの石材を平らに敷いて段を形成している。その下には石材は存在しないが、石垣上端から約1.6m下で灰色砂礫層となった。

出土遺物は、西半の埋土や石材の間から、瓦・陶器甕・染付・杓・漆椀・板材などが出土した。寛永通宝も2枚、石垣近くの青灰色粘土上層から出土した。

石垣西側の埋土の状況から、池状の遺構に伴う石垣であると思われる。

石垣1の裏込め最上層は試掘調査の上層遺物包含層である。遺物は瓦小片が主で、巴文軒丸瓦や平瓦など多量の瓦が出土した。上層遺物包含層の下は暗褐色砂・褐灰色粘性砂が堆積し、さらに下層は石垣1の西側と同様な堆積を示し、その埋土内からも鬼瓦片を含む

多量の瓦片や木製品が出土した。

掘削の結果、東南部で石垣2を検出した。石垣2は、石組みは2～3段分のみ残存していた。北東側については調査区外となるため不明である。時期は近世と思われる。

下層遺物包含層 石垣2の東側で、掘削を免れた状況で弥生時代～古墳時代の遺物包含層が残存していた。2層に分層でき、古墳時代須恵器壺や弥生土器などが出土した。

3. まとめ 石垣1と石垣2との関連は明確でないが、石垣2構築、暗灰色粘土が堆積し石垣1構築と石垣1上端の石材積みなおしがなされている。二つの石垣に伴う埋土の堆積状況は灰色粘土と植物遺体層との互層で、澱んだ状態であり、池状の遺構を想定できる。

上層遺物包含層は、石垣1の構築段階の整地層と判明した。

また、石垣構築の際に影響を受けていない部分については、下層の遺物包含層が良好に存在することが判明した。



fig. 301 調査区平面図

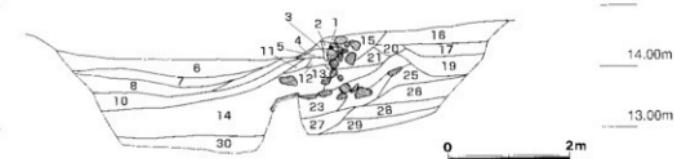


fig. 302 調査区断面図

- | | | |
|-----------------------|---------------------|------------------------|
| 1. 淡灰褐色粘土 | 11. 淡褐色砂 | 21. 淡灰褐色砂質土 |
| 2. 淡灰褐色粘性砂質土 | 12. 褐色砂 | 22. 褐灰色粘性砂質土 |
| 3. 暗灰褐色粘性砂 | 13. 稲沢褐色粘性砂質土 | 23. 暗灰褐色粘土混じり砂 |
| 4. 淡灰褐色粗砂混じり粘質土 | 14. 暗灰褐色粘土～植物遺体層 | 24. 暗灰褐色砂質土 |
| 5. 淡褐色砂質土 | 15. 淡褐色砂質土 | 25. 黄褐色砂質土 |
| 6. 淡褐色粗砂 | 16. 暗灰褐色粘性砂質土 (瓦多数) | 26. 暗灰褐色粘質土 |
| 7. 淡青褐色粗砂 | 17. 粘褐色砂 | 27. 淡青褐色粘土 (木製品含む) |
| 8. 淡青灰色粗砂 | 18. 淡青褐色和性粗砂 | 28. 明青灰色粘土ブロック混じり暗灰色粘土 |
| 9. 明青灰色粘土ブロック混じり暗灰色粘土 | 19. 暗灰褐色砂 | 29. 暗灰褐色粘土 |
| 10. 暗灰褐色粘土 | 20. 暗灰褐色砂質土 | 30. 灰色砂質土 |

みくら 41. 御藏遺跡 第2次調査

1. はじめに

御藏遺跡は長田神社の北方から流れる茹藻川が形成した、扇状地扇央付近に立地する遺跡である。渓川の付け替えに伴って開削された新渓川は、ほぼ直線的に南西流した後に茹藻川と合流し、茹藻川の流路を踏襲して海に流れ込むが、御藏遺跡の西側を流れる新渓川は茹藻川の流路を踏襲した部分であるため、現在の地形は近代以降に改変されたものではなく、概ね自然地形を留めていると考えられる。調査地点周辺の微地形を見ると、北西から南東へ低くなる緩傾斜地であるが、西側の新渓川に沿って自然堤防と考えられる高まりが続いている。その後背地に相当している。平成元年度調査地点東方約100mの位置で実施した第1次調査では、遺物の出土はあったものの明確な以降は検出されなかった。したがって地形的に見て今回の調査地点周辺が遺跡の中心地であると推定されていた。

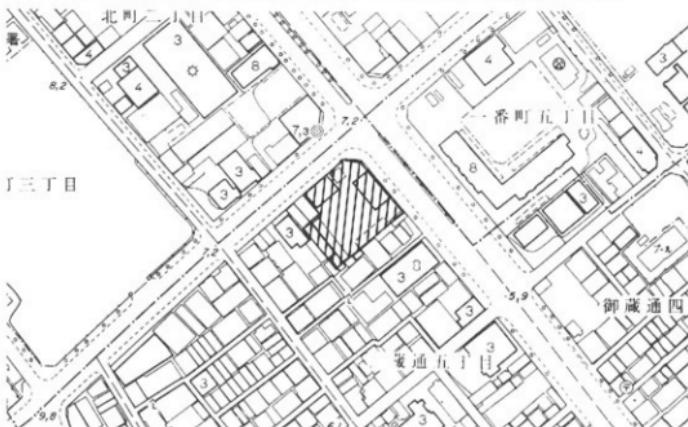


fig. 303
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査前の地表面は調査区の中央で約70cmの段が存在したが、これは近代以降の造成によるもので、それ以前の旧耕作土・床土はほぼ水平であった。その下は遺物包含層である茶灰色粘質土、褐灰色砂混じりシルト、褐灰色砂質土と続くが、茶灰色粘質土は調査区の南半、褐灰色砂混じりシルトは南東部分、褐灰色砂質土は南西部にのみ分布する。さらに下は旧河道の淡褐色～淡黄褐色砂あるいは旧河道最終堆積土の淡黄褐色シルトに至る。奈良時代の遺構面は褐灰色砂混じりシルトの、古墳時代の遺構面は褐灰色砂質土、淡褐色～淡黄褐色砂あるいは淡黄褐色シルトの上面であるが、調査中は駁接することができず、同一面で遺構を検出した。褐灰色砂質土の下には遺構は存在しなかったが、弥生時代頃のある時の地表面になると思われる。また、淡褐色～淡黄褐色砂や淡黄褐色シルトにも極めて微量な遺物が含まれていたが、擾乱の中に設定した下層探査用のテストピットや井戸SE02の掘形壁面の観察では旧河道最終堆積や後背湿地の堆積しか確認できず、さらに下層には遺構面が存在する可能性は極めて低いと判断される。